

地域で進める
乳幼児と親の《社会的なつながり》づくりと
地域で取り組む
乳幼児期からの子供の教育支援のための

プログラム 事例集

地域プログラムの試行的取組



平成 22 年 3 月

東京都教育委員会

地域で進める
乳幼児と親の《社会的なつながり》づくりと
地域で取り組む
乳幼児期からの子供の教育支援のための

プログラム 事例集

地域プログラムの試行的取組

東京都教育委員会 平成 22 年 3 月

はじめに

都市化、核家族化、少子化、地縁的関係の希薄化等を背景として、子供には、夜更かしや欠食などの基本的な生活習慣の乱れ、子供同士の関わりの減少など対人関係の希薄化といった問題、また、親自身の孤立化や子育て文化の未継承、子育てに自信がない親や教育に関心が薄い親の増加などといった問題が生じています。

平成 19 年 12 月、東京都生涯学習審議会は「乳幼児期からの子供の発達を地域で支えるための教育環境づくりの在り方について」答申しました。答申では、家庭の教育力向上のためには乳幼児期の子供と親の「社会的つながり」が重要であることを提起し、「乳幼児期からの子供の教育支援の重要性を全都に普及させる取組」と「乳幼児期からの子供の教育支援の取組を地域に定着させるための取組」を柱としたプロジェクトの実施について提言しました。

東京都教育委員会では、答申を受け、平成 20 年度から、家庭教育の機能及び地域教育の機能を高めることを通じて、人間形成の基礎となる乳幼児期からの子供の健やかな成長を支援する「乳幼児期からの子供の教育支援プロジェクト」に取り組んでいます。

このプロジェクトでは、取組の一つとして、地域において乳幼児と親が、孤立しないで気軽に相談できるようつながり（社会的つながり）をつくるなど、地域が一体となって家庭における教育を支援する仕組みづくりとして、「家庭教育支援チーム」の設置を進めています。

特に、今年度は、乳幼児期からの子供の発達を軸に据えた地域における多様な主体のネットワークの形成を目指して、ネットワークの作り方のノウハウや家庭教育支援チームの具体的な実践活動に試行的に取り組みました。本事例集では、実際に取り組んだ地域プログラムとその内容を紹介いたします。

また、東京都教育委員会では、今年度、「家庭教育支援チーム」の中核となる「担い手」の養成研修にも取り組み、「担い手」に必要な資質・能力、養成研修プログラムの企画・立案のポイント等を「地域で乳幼児期の子供と親を支える一家庭教育支援の「担い手」養成のためにー」にまとめました。本事例集とあわせて御覧いただき、「家庭教育支援チーム」と「担い手」の地域における活動イメージを描いていただきたいと考えております。

このような取組や冊子を参考にしながら、ぜひ、区市町村教育委員会や公民館等社会教育施設において、「家庭教育支援チーム」の設置や「担い手」の養成に取り組んでいただき、地域における家庭教育支援の取組が一層積極的に展開されることを期待します。

目次

はじめに	i
第1章 「乳幼児期からの子供の教育支援プロジェクト」について	1
第2章 地域における家庭教育支援について ～地域プログラムの「試行的取組」～	3
第3章 各地域の家庭教育支援チームの取組概要	7
第4章 プログラム事例	17
事例1 乳幼児期の子供とその親の知り合い広げや気軽な相談対応	
事例2 乳幼児の親に学習の機会を提供する	
事例3 子育てに関するヒントを提供する	
事例4 乳幼児期の子供の親の仲間づくり	
事例5 親になるための学びのプログラム	
事例6 家庭教育支援チームの活動のPR・発信	
事例7 地域の連絡会等への参加	
事例8 家庭教育支援チームの運営上の工夫	
第5章 地域で乳幼児期からの教育を支援するために	44



第 1 章 「乳幼児期からの子供の教育支援プロジェクト」について

1 「乳幼児期からの子供の教育支援プロジェクト」について

子供の夜型生活による睡眠不足、朝食の欠食などの食生活の乱れ、外遊びの減少やテレビ・ゲームに費やす時間の増加、人間関係の希薄化や集団のルールが身に付いていないなどの社会性の欠如等々、子供たちの基本的な生活習慣の乱れが問題視されています。そして、このような生活習慣の乱れが子供の学力や体力に影響を与えているとも言われている。

また、核家族化、少子化、地域とのつながりの希薄化、産業構造や働き方の変化などの社会環境の変化により、「しつけや子育てに自信がない親」、あるいは「子供の教育に関心が薄い親」の増加など、家庭の教育力の低下が指摘されている。

このような社会状況を踏まえ、平成 18 年の教育基本法改正では、家庭教育や幼児期の教育について新たに規定された。

東京都教育委員会では、平成 18 年度から 20 年度まで、「子どもの生活習慣確立プロジェクト」として、早起き・早寝・朝ごはんといった基本的な生活習慣の確立をめざした普及・啓発に取り組んできた。

一方、近年、医学や脳科学の研究から、乳幼児期が人間形成の基礎を築く重要な時期であることが、あらためて科学的に、少しずつ明らかになってきた。

それらを踏まえ、乳幼児期からの子供の教育の重要性を普及し、地域で子供の教育を支援するしくみを作っていくために、東京都教育委員会では、平成 20 年度から「乳幼児期からの子供の教育支援プロジェクト」に取り組んでいる。

このプロジェクトは、「家庭教育の機能及び地域教育の機能を高めることを通じて、人間形成の基礎となる乳幼児期からの子供の健やかな成長を支援する」ことを基本的な考え方として、下記の二つの施策の柱の下、それぞれ二つの事業に取り組んでいる。

(1) 乳幼児期からの子供の教育の重要性について全ての保護者に伝える。

- ①保護者向け資料の作成・配布
- ②ウェブサイトの開設、広報ポスターによる啓発

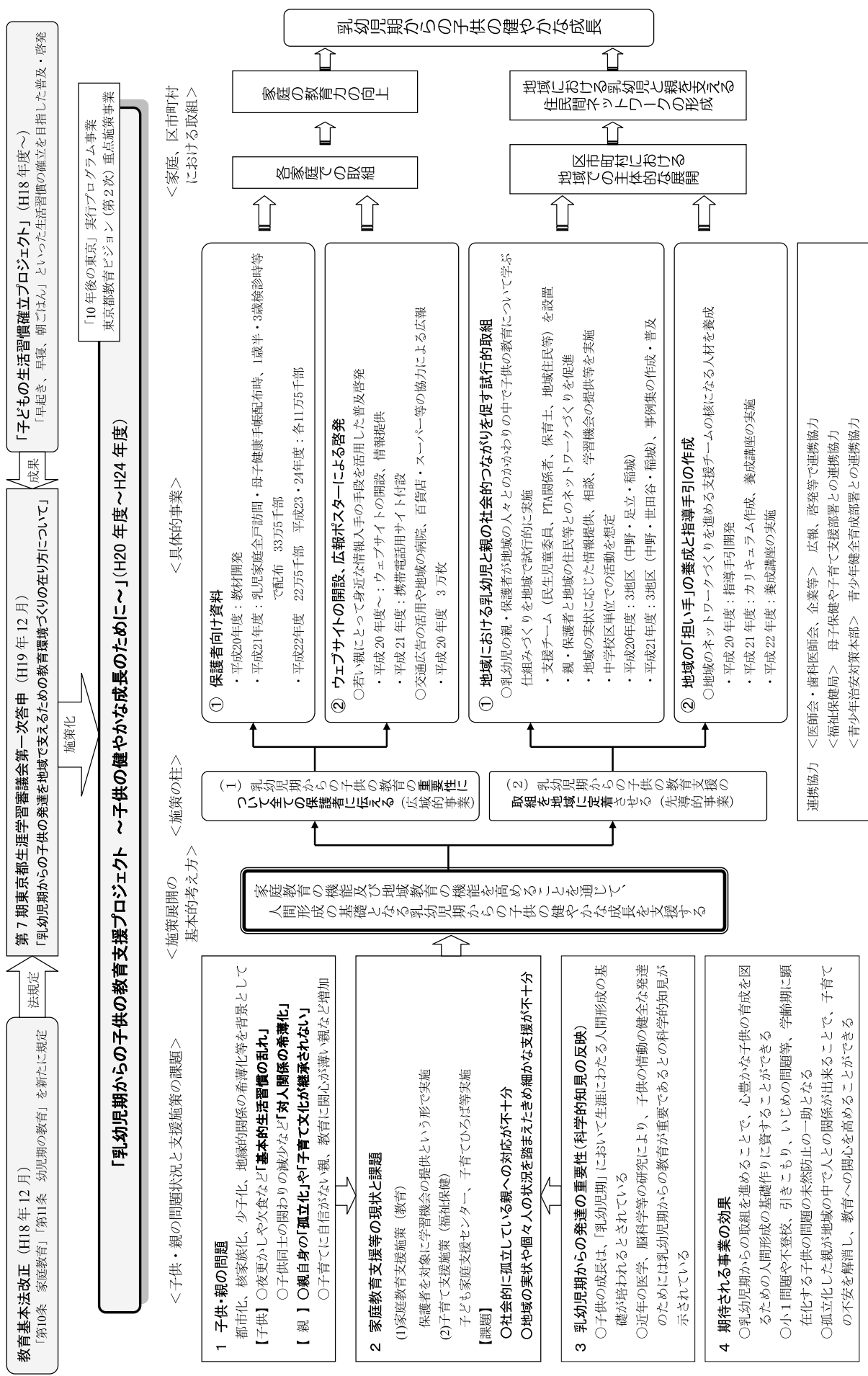
(2) 乳幼児期からの子供の教育支援の取組を地域に定着させる。

- ①地域における乳幼児と親の社会的つながりづくりを促す試行的取組
- ②地域の「担い手」の養成と指導手引の作成

このプロジェクトの取組概要は図 1 のとおりである。

【図1 乳幼児期からの子供の教育支援プロジェクト 取組概要】

「乳幼児期からの子供の教育支援プロジェクト」の取組について



第2章 地域における家庭教育支援について

～地域プログラムの試行的取組について～

(1) 乳幼児期の子供とその親の「社会的つながり」の必要性

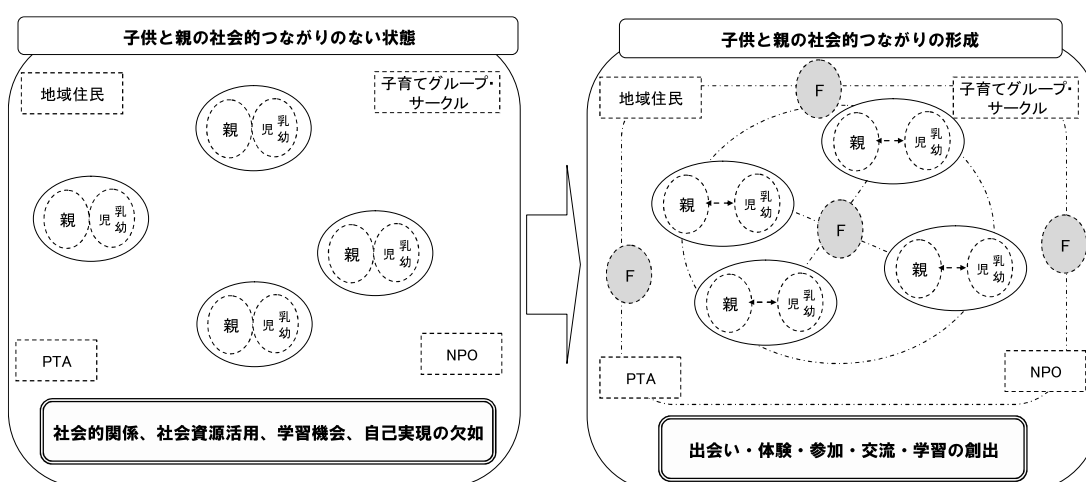
個々の家庭の教育機能が十分に発揮されるためには、「地域」を基盤とした乳幼児期の子供とその親の「社会的つながり」があることが重要である。しかし、この「社会的つながり」は自然発生的につくられるわけではないから、「社会的つながり」づくりを中心とした家庭教育支援の取組として、下記の三つに取り組むことが必要となる。

- ① 地域や社会から孤立している親子に対し様々な社会のネットワークの中に参加することを動機付ける
- ② 親同士がお互いに支えあう関係づくりを促す
- ③ 地域のNPO や子育てサークルなどの支援者たちとのネットワークを構築する

これらの取組を通して、地域の中で多様かつ持続的な「社会的つながり」を創り出す「仕掛けづくり」の役割を果たす人を、このプロジェクトでは地域の「担い手」と呼ぶこととし、親や地域住民（子育てサークル、NPO）の中にある「互いにつながりたい」という潜在的な欲求やそのための能力を引き出し、乳幼児期の子供を持つ親たちの社会的孤立といった問題を地域レベルで解決していく活動を行う。図2はその社会的つながりを形成する活動のイメージ図である。

【図2】乳幼児期からの子供と親の社会的つながり形成前後のイメージ図

（出典：平成19年12月東京都生涯学習審議会第一次答申 p.15）



〔F〕は「地域の担い手（ファシリテーター）」を指す。基本的には地域住民や親自身、子育てグループ・サークル・NPO、PTAのメンバーなどがつながりづくりの担い手となる。

(2) 地域における「家庭教育支援チーム」の取組

前述した図2のような地域の実状にあわせた乳幼児期からの子供の発達を軸に据えた地域における多様な主体のネットワークを形成するためには、地域の実状に応じた情報提供、相談、学習機会の提供等を実施するなど、乳幼児期の子供と親が様々な場や機会に参加することへの後押しをするための仕掛けづくりを行う役割を担う「担い手」を核とする「家庭教育支援チーム」を結成することが必要である。

この「家庭教育支援チーム」の構成メンバーは、地域住民や民生児童委員、PTA 関係者、保育士等に加え、当該地域における教育・福祉・医療・保健機関の専門職の参加が考えられる。

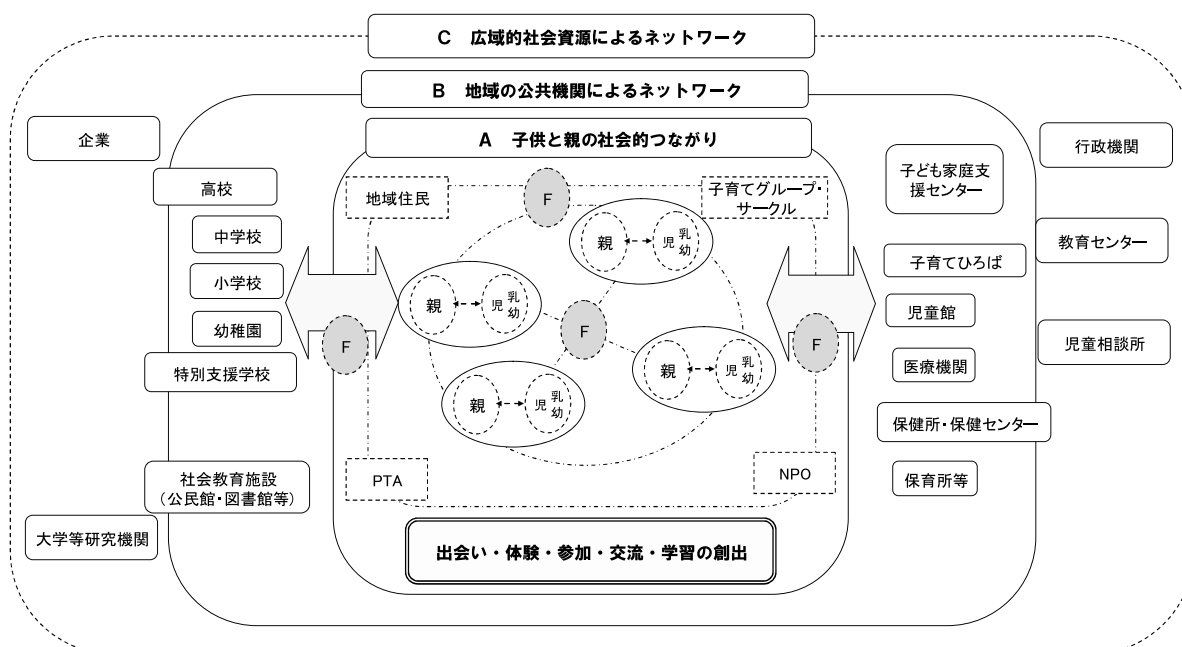
また、活動エリア（範囲）としては、乳幼児期の子供と親の生活圏を想定しており、概ね小学校区から中学校区程度が想定される。

この地域における家庭教育支援のネットワークのイメージを図示すると図3のようになる。また、図4は、このプロジェクトにおける「家庭教育支援チーム」のイメージ図である。

【図3】【乳幼児期からの子供の発達を軸に据えた地域における多様な主体のネットワーク】のイメージ図

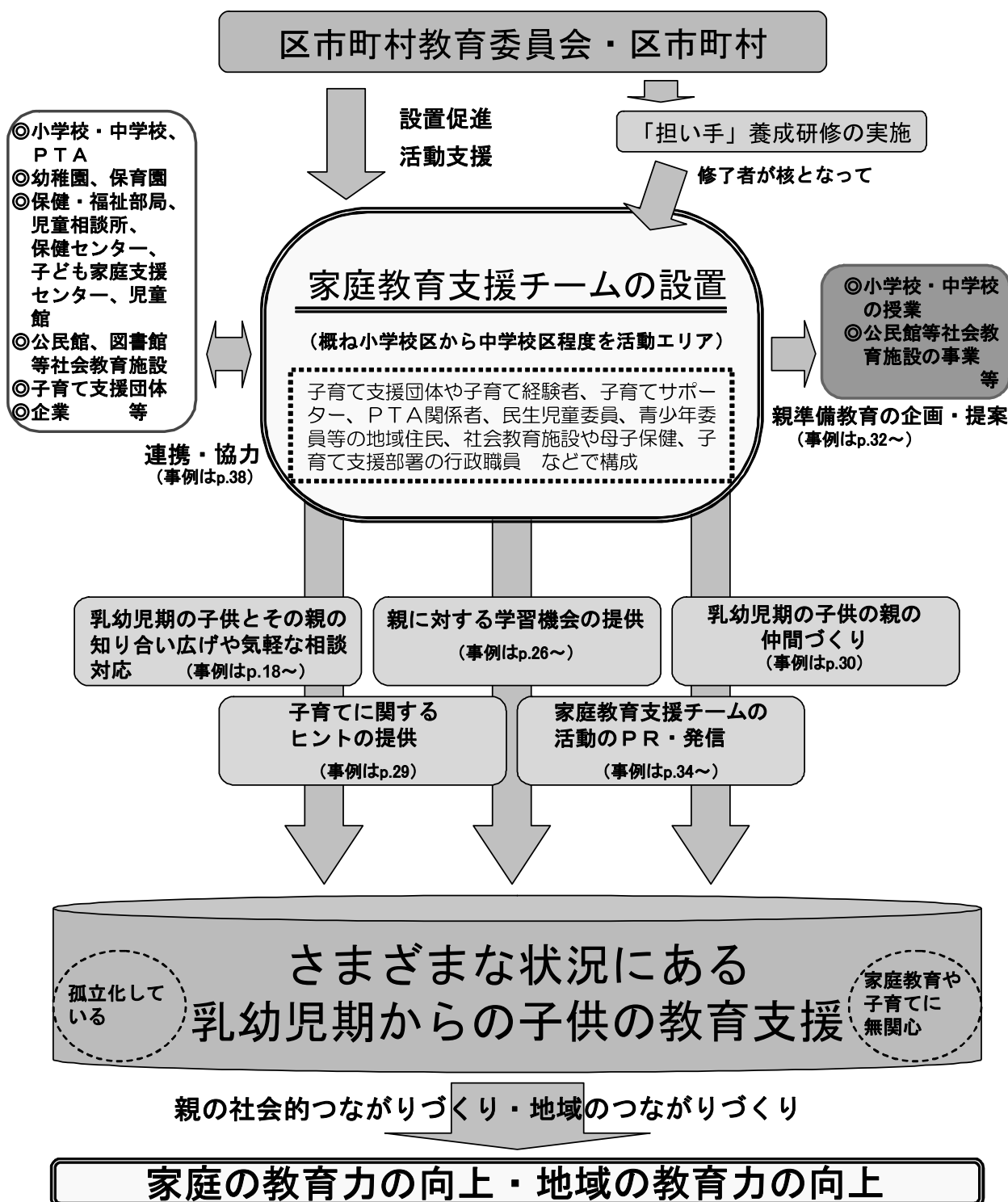
(出典：平成19年12月東京都生涯学習審議会第一次答申 p.16)

乳幼児期からの子供の発達を軸に据えた地域における多様な主体のネットワークの形成



【図 4】

乳幼児期からの子供の教育支援プロジェクトにおける 家庭教育支援チームのイメージ図



(3) 地域プログラムの「試行的取組」について

前述の「支援チーム」の在り方について、地域の実情に応じた支援チームの構成や担い手の役割、チームの活動方法や内容、プログラム等を具体的にするために、事業モデルとして試行的に、都内4地区で実施した。

そのために、地域において家庭教育支援や子育て支援の活動をしている機関・団体等に、地域ごとに特徴あるプログラムを開発・作成・検証する「プログラム検討委員会 各地区部会」を設置し、「支援チーム」の活動である「親の社会的なつながりづくり」の活動に取り組んでいただいた。

平成21年度には、中野（2ヶ所）、世田谷、稲城の3地区4ヶ所で、地域の実状を踏まえて、さまざまなメンバーで「支援チーム」が構成され、「親の社会的なつながりづくり」に向けた多様な取組が展開された。次章以降に取組の概要とそれぞれのプログラム事例を紹介する。

第 3 章

各地域の家庭教育支援チームの取組概要

1. 中野地区（A）の取組み概要・・・・・・・・P8

- 児童館を拠点に、同じ地域で子育て中の親が、主体的に仲間づくりの活動を実施

2. 中野地区（B）の取組み概要・・・・・・・・P10

- 児童館を拠点に、家庭教育学級の仲間で作る子育ての先輩グループが親のグループづくり支援や気軽に集える場と学習機会を提供

3. 世田谷地区の取組み概要・・・・・・・・P12

- 小学校を拠点に、元PTA役員など子育て先輩を中心とした子育て支援グループが気軽に集える場を提供

4. 稲城地区の取組み概要・・・・・・・・P14

- 文化センター（公民館と児童館）を拠点に、子育て支援ボランティアである子育てサポーターが気軽に集える場を提供



■ 中野地区（A）の取組概要

1 家庭教育支援チーム

○主体：乳幼児を子育て中の親たちのグループ「まんまるママの会」

同じ地域で子育てをする母親たちが、相互に支え合いながら子育てについて学んだり、お互いのつながりや外部とのつながりを作っていこうとする形態の支援チームである。

○活動拠点：中野区仲町児童館（中部地域子ども家庭支援センター）

○メインの活動：乳幼児期の子供を持つ母親の子育て仲間による、同世代のつながりづくりと、そのつながりを広げるイベントや講座等事業の実施

2 取組・活動の方針

○子育て中の親が主体となって、地域に、子供と親の社会的なつながりをつくり、広げるための手法の開発をねらいとする。

○同じ地域で子育てをしている若い親同士が共同作業を行うことを通して、仲間を作り、子育ての悩みや不安を軽減し、乳幼児期の家庭教育を行う知識や自信を付けることができるような関係を築く。

3 活動プログラム

(1) お誕生会 （詳細は p. 18）

お互いに顔は知っている程度の児童館利用者同士が仲間になるために、子育てをしながらでも可能な範囲で、お互いの子育てにプラスになるような活動として、お互いの子供の成長を喜びあう「お誕生会」を実施する。

(2) 学習機会の提供 （詳細は p. 28）

○乳幼児を子育て中の親たちが、「自分たちが聞きたい話を聞く講座」を企画し、実施する。

○同じ地域で子育てをする母親たちが、子育てについて学んだり、地域のつながりづくりの活動を進めるためのグループづくりの一環として実施する。

(3) メーリングリストや記録ノートの活用 （詳細は p. 39）

支援チームのメンバーには1歳～3歳くらいの子供がいて、育児や家事などで、なかなか全員が集まって打合せを行なうことが難しい。そこで、連絡や相談などのコミュニケーションの方法として、①携帯電話でのメーリングリスト機能を使用し、日常的に連絡を取り合う ②記録・連絡ノートを作り、欠席者への打合せ事項等のフォローを行う、という体制をとり、共通理解を図る工夫を行う。

(4) 支援チームのスキルアップ (詳細は p. 42)

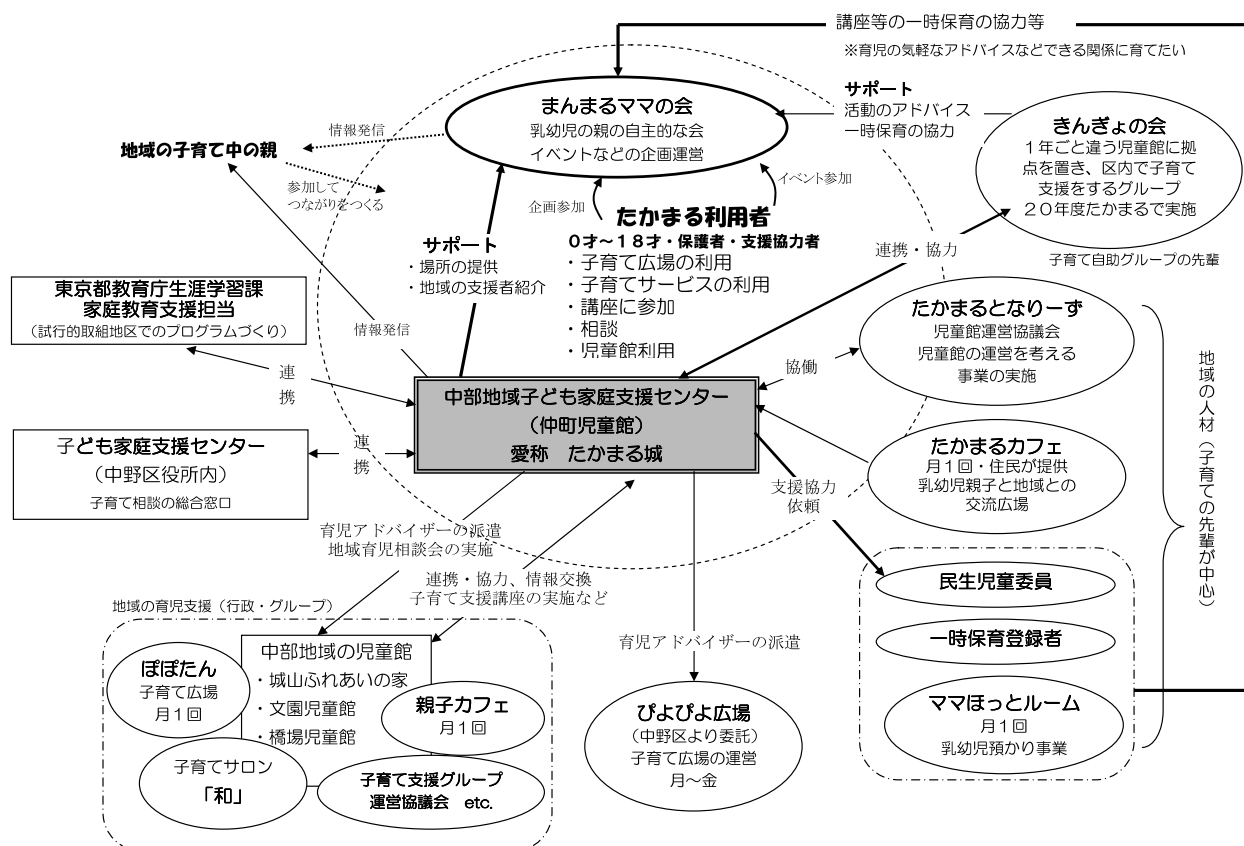
仲間づくりの活動のためのスキルを身につけ、プログラムを充実させる。
親子で楽しめるパネルシアターについて学び、製作、上演を試みた。

4 試行的取組から見てきたこと

○この地域の実状として、転出入が多く、地域の人間関係が薄い中での子育てに不安がある親が多い。「まんまるママの会」のメンバーへのアンケートでは、「児童館があつてよかった」「このままでは社会から孤立していくと思った」「企画会議に参加して社会とのつながりを実感した」「あらためて子育て仲間がいることの心強さを知った」などの感想があり、**地域の仲間や子育て先輩、公共施設等とつながる機会を作る必要性、また、そのためのコーディネーターの必要性が改めて認識された。**

○孤立しがち、引きこもりがちな乳幼児の子育て時期に、親が自分の人生経験を生かしながら活動することは、**活動に伴う苦労を超える充実感が得られ、親がイキイキとすることが子育てにとっても効果があることがわかった。**また、復職や再就職を考えている母親も多く、仕事と子育てを両立させたいというニーズは大きい。活動を支援する際には、世代による意識の変化等も踏まえる必要がある。

5 地域の機関・団体等との連携図



■ ■ ■ 中野地区（B）の取組概要

1 家庭教育支援チーム

○主体：区内の子育て支援グループ「きんぎょの会」

かつて区主催の家庭教育学級を受講した子育て仲間が、子育て中の親の気持ちを理解する子育ての先輩として、家庭教育支援の活動を行っている。

○活動拠点：平成 20 年度 中野区仲町児童館（中部地域子ども家庭支援センター）
平成 21 年度 中野区若宮児童館

○メインの活動：

- ①乳幼児期の子供を持つ母親のための学習機会や気軽なおしゃべりの場の提供
- ②母親の子育て仲間をつくり、そのつながりを基に自主的な活動をするための支援

2 取組・活動の方針

○活動は、自分たちの子育ての経験を基に、母親の気持ちに共感をもって接することを大切に
にする。

○身近で気軽な子育ての相談相手や子育て仲間を作る（親の社会的なつながりをつくる）と
ともに、主体的に活動を行える親同士のグループ化のための手法の開発をねらいとする。

3 活動プログラム

(1) 気軽なおしゃべりの場「きんぎょルーム」 （詳細は p. 20）

自分たちのかつての子育て中の想いを基に、子育ての後輩のために“ささやかな
悩みを打ち明けたり、他愛のないおしゃべりができる空間”を提供する。

(2) 子育てに関する学習機会の提供 （詳細は p. 26）

子育て中の親のために、親の心をほぐし、育児の不安を軽減できるプログラムと
して、専門家を招いて「子育てミニ講座」を開催する。

(3) 親同士の自主グループづくりのしかけ （詳細は p. 30）

子育て中の親同士が相互に支え合い、主体的に仲間を広げる活動をするよう、仲
間づくりのための仕掛けを実施した。

(4) 活動記録の作成 （詳細は p. 34）

家庭教育支援チームとして取り組んだ、子育て中の親同士の仲間づくりの活動の
記録を作り、支援チーム活動の理解の促進をはかる。

4 試行的取組から見てきたこと

○子育てに関する学級・講座は数多く開催されているが、仲間づくりにつながることは少ない。また、子育て友達は、広がって《子供と親の社会的なつながり》のための活動につながることは少ない。今回「きんぎょの会」が行った自主グループ作りの試行的取組は、

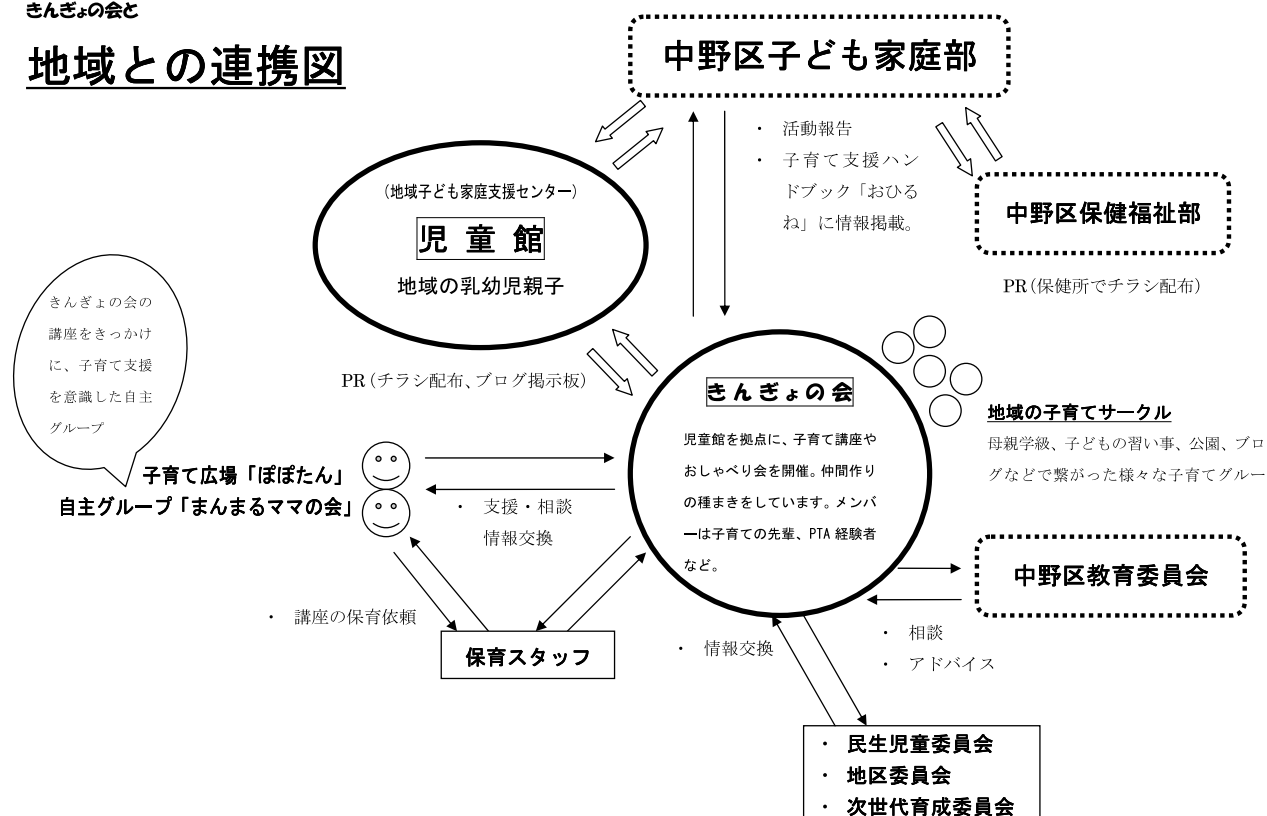
- ① 1年間継続して同じ地域で開催する
- ② 講座の内容を参加型にし、子育ての先輩である「きんぎょの会」が、ファシリテーターを行なう
- ③ 気軽なおしゃべりの場である「きんぎょルーム」と関連付けながら開催する
- ④ 年間の後半にはコミュニケーションなど仲間づくりを意識したテーマを設定する
- ⑤ 自然な形でのワークショップを通して「子育ての仲間がいることは心強い」「自分たちでも活動できるかもしれない」という気持ちを引出す
- ⑥ 実際に活動をする際には、自分たちの経験を基に企画や運営の支援を行なうという、グループ作りのための一連のモデルプログラムとなった。

○専門家ではない子育ての先輩だからこそ親の気持ちが引出せたり、活動する際のモデルになることができ、子育ての先輩が地域の家庭教育支援にかかわることが大切であることがわかった。

5 地域の機関・団体等との連携図

きんぎょの会と

地域との連携図



■ ■ 世田谷地区の取組概要

1 家庭教育支援チーム

○主体：子育て支援ボランティアグループ「マザーリング」

スタッフは、子育て経験者であり、PTAの現役員や元役員、栄養士、元青少年委員等で構成されており、世田谷区奥沢地区を中心に活動

○活動拠点：世田谷区立東玉川小学校内の放課後の子供の居場所室（通称：BOP 室）

○メインの活動：上記の部屋を使って、子育てサロンを開催。

○東玉川小学校は、文部科学省のコミュニティスクール推進事業校の指定を受け、学校運営委員会を設置し、4つのプロジェクトを展開している。具体的には、「校内緑化」、「学習支援」、「読書活動」、「家庭教育支援」の4つのプロジェクトで、「家庭教育支援」のプロジェクトの中の一つとして、子育てサロンを位置付けている。

2 取組・活動の方針

○「どの子も親も幸せになって欲しい、共に育ち合いたい、子どもは未来からの贈り物…しっかり育てて未来に返すのが大人の責任」との願いから、乳幼児期の子供とその親の居場所を提供する。

○特に奥沢地区は、大田区と隣接する地域で、周辺に児童館等がないことから、乳幼児期の子供と親が、身近で、気軽に、そして小学校内にあるということで安心して足を運ぶことができ、地域の人に見守られていると実感する場を提供する。

3 活動プログラム

(1) 東玉川子育てサロン （詳細は p. 22）

東玉川小学校内の子供の居場所活動の部屋を使用し、火曜日の午前9時45分から11時45分まで開催している。乳幼児が遊べる遊具を用意し、遊んだり、話をしながら、親子が他の親子やスタッフと一緒に過ごす時間を提供している。

(2) 子育てのヒントカード （詳細は p. 29）

子育てのヒントやポイントを名刺サイズの紙にプリントし、乳幼児の親と話をする中で、必要に応じて渡している。

(3) 「奥沢地区子育てひろばのご紹介」への掲載 （詳細は p. 35）

世田谷区役所の奥沢まちづくりセンターでは、奥沢地区で定例的に開催されている子育てひろば・子育てサロンを紹介する「奥沢地区子育てひろばのご紹介」というPRちらしを作成・配布している。ここには「東玉川子育てサロン」を含め4ヶ所の概要と年間開催日と案内図が掲載されている。

(4) 奥沢地域子育て支援者情報交換会への出席 (詳細は p. 38)

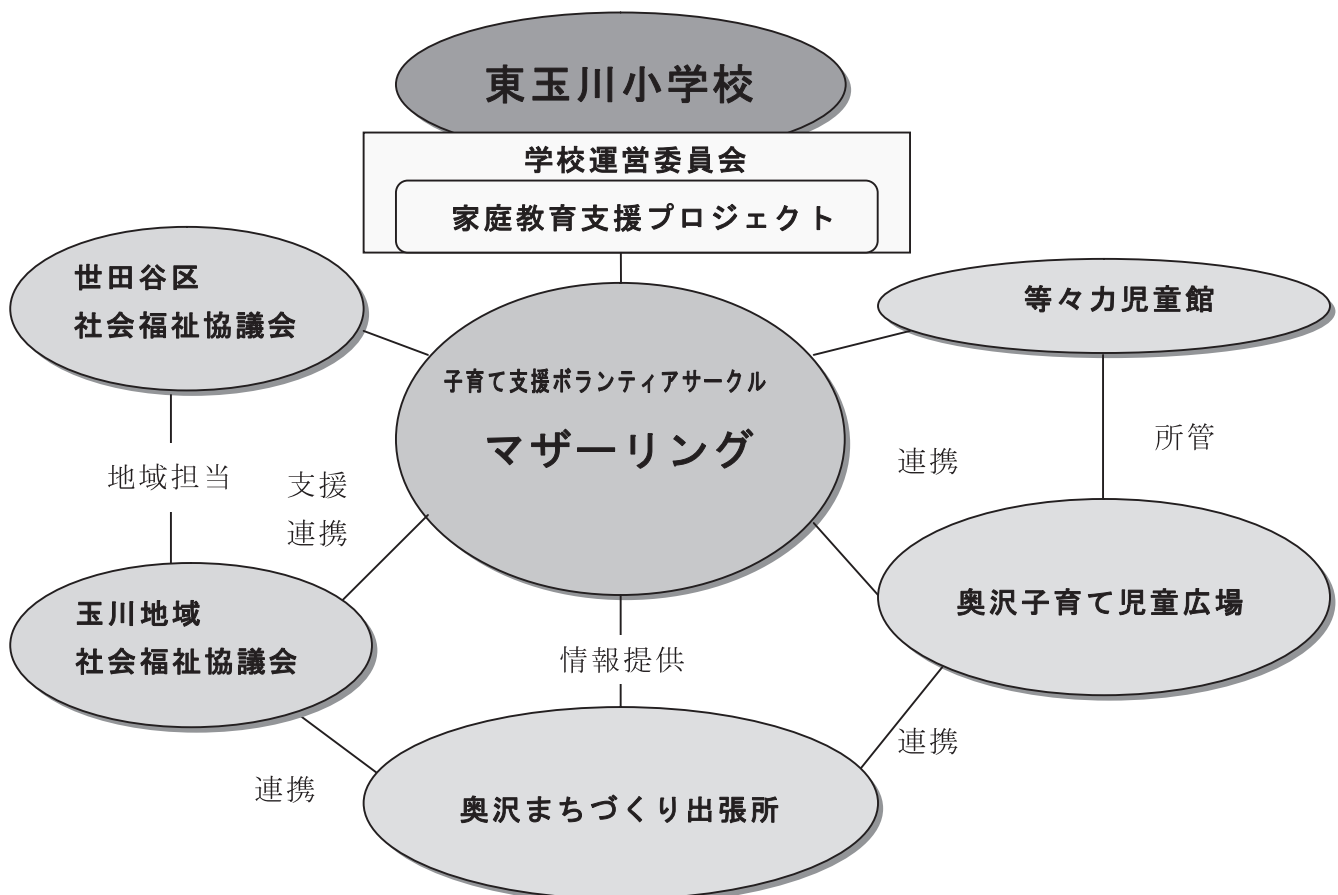
世田谷区等々力児童館が主催し、奥沢地区内において子育て支援に関わる方々が一堂に会して、子育て支援に関連する情報等を相互に共有・交換する会（年２回）に出席している。

4 試行的取組から見てきたこと

○世田谷地区の取組は、スタッフの多くがPTAの現役員や元役員、元職員の栄養士、元青少年委員、学校運営委員会委員などに就いており、地域の事情、特に東玉川小学校の状況をよく知っており、学校教職員との信頼関係や協力関係の上に活動がある点に大きな特徴がある。

○区境で、近隣に児童館がない地域での子育てサロンの開設が、周辺の乳幼児と親にとって身近で貴重な場となっている。また、特に行事やプログラムを実施せずに、子供と親がそばにしながら、子供のペースでのんびりした時間を過ごせるよう、スタッフは遊び相手と話し相手になる場（空間）を提供していることが、この子育てサロンの魅力の一つになっている。

5 地域の機関・団体等との連携図



稲城地区の取組概要

1 家庭教育支援チーム

- 主体：稲城市第四公民館主催の「子育てサポーター養成講座」の修了者で組織している「稲城市子育てサポーター」を母体として活動を展開した。
- 活動拠点：稲城市内の5つの文化センター（公民館と児童館の複合施設）
- メインの活動：各文化センター（児童館）で、乳幼児と親同士の交流の場として「子育てサポーターの日」を開催し、他の親子やサポーターとのつながりをつくる活動に取り組んだ。

2 取組・活動の方針

- 「乳幼児を育てるママ・パパや出産を控えたプレママ・プレパパの心に寄り添う身近な相談役」として、地域のコミュニティを築く取組を行う。

3 活動プログラム

(1) 子育てサポーターの日 （詳細は p. 24）

市内5つの文化センター（公民館と児童館の複合施設）の児童館部分を会場にして、それぞれ月1～2回、親子同士の交流ができる場所を提供。約90分の時間で、手遊び歌や工作等を楽しむ時間や自由に交流するフリースタイルを組み合わせて運営している。

(2) 親育ち・子育て講座 （詳細は p. 32）

市内の中学校の家庭科の授業で、バースコーディネーターを講師として「生命の神秘」について学ぶ機会と、「子育てサポーターの日」に参加している乳幼児と母親を招いて交流を図る機会をコーディネートし、実施している。

(3) 子育て応援フェスタ （詳細は p. 36）

乳幼児のいる家庭を対象に、子育てサポーターの活動PRを図るとともに、市内の子育て支援を行っている保育園、幼稚園、子育て支援グループ等の情報提供を行うイベントを実施している。

(4) 「子育てサポーターのしおり」の配布 （詳細は p. 37）

乳幼児を持つ親をはじめ、さまざまな人々に子育てサポーターの活動を理解していただくために、しおりを作成・配布している。子育てサポーターの活動目的と内容、活動場所の案内図、市内の相談機関の連絡先などを掲載している。

(5) 運営会議等の開催 （詳細は p. 40）

子育てサポーターの活動について協議する場として、子育てサポーター全員が集まる「全体ミーティング」と、5会場の代表が集まる「運営会議」をそれぞれ月1回開催している。5会場の乳幼児や親の情報等を共有することや、「子育てサポーターの日」の進め方を決めたり、手遊びの練習などを行う。

(6)活動マニュアルの作成・携行 (詳細は p. 41)

約 40 名の子育てサポーターが、同じ活動イメージを抱いて取り組めるよう、初心を忘れないための「心得」や「子育てサポーターの日」の活動の例を記した「活動マニュアル」を作成し、活動の際には全員が携行することになっている。

(7)スキルアップ講座 (詳細は p. 43)

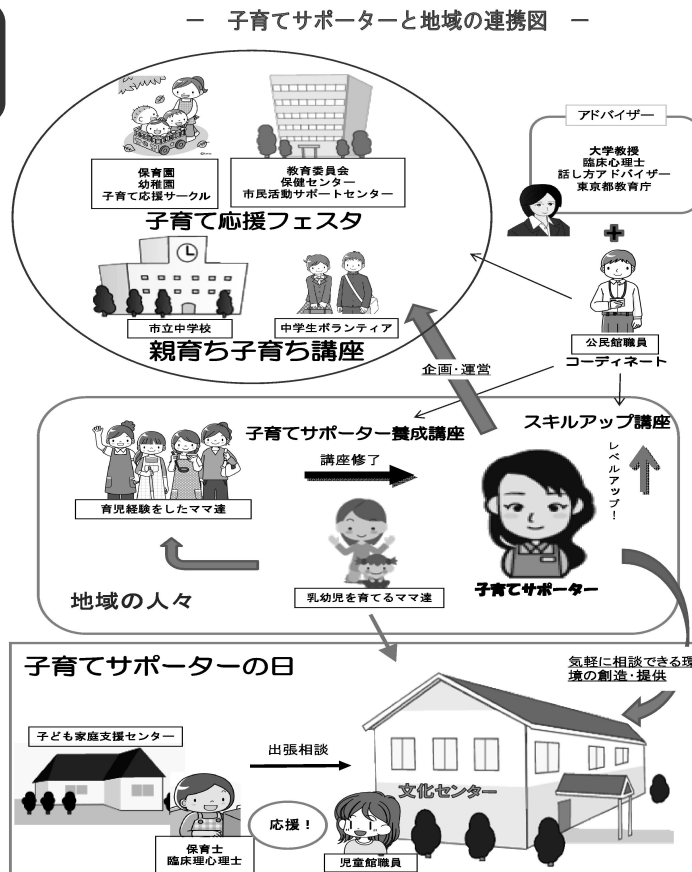
子育てサポーターの活動に必要なスキルの向上を目指し、また、サポーター活動の運営スキルを向上するために、第四公民館の主催事業として、年5回実施した。

4 試行的取組から見てきたこと

○公民館が子育てサポーター養成講座を実施し、地域のボランティアを養成し、児童館で活躍の場を提供し、その活動を公民館が支援する取組を続けることで、ボランティアにノウハウが蓄積され、活動が地域に定着してきている。稲城市が行った次世代育成支援に関する調査で、市内の乳幼児の保護者は、「子育てサポーター事業」を子ども家庭支援センター事業や私立3保育所での子育てひろば事業よりも利用しているという結果から、長く続けることが定着につながると考えられる。

○子育てサポーターの活動のPRを目的とした子育て応援フェスタでは、市内のさまざまな子育て支援の機関等だけでなく、中学生のボランティアもお願いしている。中学生にとって乳幼児や親と触れ合う貴重な機会になるだけでなく、子育て中の親が、子育てサポーターの日の活動や子育て支援の機関の情報を得ることを通して、自分の子育てには地域ぐるみの支援があることを知る、大切な機会になっていると考えられる。

5 地域の機関・団体等との連携図



第4章 フログラム事例

事例1 乳幼児期の子供とその親の知り合い広げや気軽な相談対応

- (1)同世代・子育て中のママの会が開催する
まんまるママの会の『お誕生会』（中野地区A）・・・ P18
- (2)子育て先輩が経験を基に提供する“しゃべり場”
きんぎょルーム（中野地区B）・・・ P20
- (3)小学校の学童クラブ教室を活用
マザーリングの『東玉川子育てサロン』（世田谷地区）・・・ P22
- (4)地域の子育て支援ボランティアの
『子育てサポーターの日』（稲城地区）・・・ P24

事例2 乳幼児の親に学習の機会を提供する

- (1)「きんぎょルーム」の子育て講座（中野地区B）・・・ P26
- (2)子育て世代が企画する子育て講座（中野地区A）・・・ P28

事例3 子育てに関するヒントを提供する

- 「子育てのヒントカード」（世田谷地区）・・・ P29

事例4 乳幼児期の子供の親の仲間づくり

- 自主グループ作り～親同士がつながるための働きかけ～（中野地区AB）
・・・ P30

事例5 親になるための学びのプログラム

- サポーター＋乳幼児親子＋中学校で「親育ち・子育て講座」（稲城地区）
・・・ P32

事例6 家庭教育支援チームの活動のPR・発信

- (1)活動記録の作成（中野地区B）・・・ P34
- (2)区役所作成「子育てひろばのご紹介」への掲載（世田谷地区）・・・ P35
- (3)子育てサポーターの「子育て応援フェスタ」（稲城地区）・・・ P36
- (4)「子育てサポーターのしおり」の配布（稲城地区）・・・ P37

事例7 地域の連絡会等への参加

- 奥沢地域子育て支援者情報交換会への参加（世田谷地区）・・・ P38

事例8 家庭教育支援チームの運営上の工夫

- (1)メーリングリスト＆記録ノートの活用（中野地区A）・・・ P39
- (2)運営会議等の開催（稲城地区）・・・ P40
- (3)活動マニュアルの作成・携行（稲城地区）・・・ P41
- (4)チームのスキルアップ《パネルシアター講習会》（中野地区A）・・・ P42
- (5)スキルアップ講座（稲城地区）・・・ P43

事例 1 (1)

乳幼児期の子供と親の知り合い広げや気軽な相談対応 (1)同世代・子育て中のママの会が開催する まんまるママの会の『お誕生会』

《中野地区(A)の取組》

- 同じ地域に住み、児童館を利用する乳幼児を子育て中の親が、サービスの受け手としてだけでなく、主体的に地域の子育て仲間づくり（ヨコのつながりづくり）の担い手になるプログラムの試行として取り組む。
- お互いに顔は知っている程度の児童館利用者どうしが仲間になるために、子育てをしながらでも可能な範囲で、お互いの子育てにプラスになるような活動として、お互いの子どもの成長を喜びあう「お誕生会」を実施する。
- 地域の子育て支援の担い手が次の世代につながり、タテのつながりが生まれることを目指す。

●関わった人たち

- 地域の子育て仲間のグループ「まんまるママの会」（普段から同じ児童館を利用する乳幼児の親のグループ）
- 中野区仲町児童館の職員（日常的に「まんまるママの会」のメンバーに接し、グループとしての活動の支援を行なう）
- 子育て先輩の子育て支援グループ「きんぎょの会」（グループの運営や事業の実施に関するアドバイスを行なう）

取組内容

◆知り合いになるための、きっかけ作り

館内に専用の掲示板（コーナー）を設置し、来館する親子のお誕生日を書き込めるようにする。まんまるママの活動の様子も写真などで紹介。→

◆お誕生会の実施

- ・ 2～3ヶ月に1回、平日の午前中に児童館で開催する。無料。
- ・ 毎回 20 組程度の親子が参加している。
- ・ 館のイベントとして定着してきており、父親の参加も見られるようになった。

◆お誕生会プログラムの工夫

お互いの子供の成長を喜び合う内容にするためにプログラムを工夫している。

- ・ 成長の記念に「手形、足形」をとる
- ・ 名前入り手作りメダル（折り紙）
- ・ 手遊び歌や絵本読み聞かせ
- ・ パネルシアター上演 など



大人気の手形・足形をサポート

◆無理せず活動続ける工夫

- ・全員が集まれることは少ないので、連絡ノートをつくり来館時に各自が確認する。また、日常的な連絡は携帯電話のメーリングリストを活用する。
- ・毎回の連絡係を決めて、特定のメンバーに負担がかからないようにする。

◆まだまだ進化中の活動

- ・お誕生会に参加する親子に、「一緒に活動しませんか？」と誘いかけ、友達のいない母親にアプローチしている。
- ・内容充実のために、区内の子育て先輩を講師にパネルシアター講習会を実施してスキルアップをはかっている。



手作りお誕生会で進行も。

●地方から来た祖父母も参加するなど、来館の親子に定着してきた。●拠点の児童館が、活動を見守りながらサポートする

まんまるママの気持ち



お昼を食べながらミーティング

※アンケートより

- ・参加するまでは孤独だなと思っていましたが、子育て仲間ができて心強いです
- ・いろいろな才能がある人がいるのに、子育てに生かせないのは残念だと思いました
- ・社会の一員としての実感が得られています
- ・知らない人とのコミュニケーション（仲間づくり）は難しいけれど、勇気をもらえた
- ・まんまるママは、同世代の子育ての助け合いの場です
- ・自分たちで動くことで実現できることを学びました
- ・子供も自分も児童館に慣れて、友達ができました
- ・自分の子よりも小さな赤ちゃんのママからの励ましの言葉が、活動の嬉しさです
- ・子育てについて広い観点で考えるようになりました
- ・最初は「経験や考え方も違うのにママというだけで友達になれるのか？」と思っていましたが、いまはそれぞれが力を合わせるとこんなに色々なことができるんだ！と感動しています

●取組を通してわかった

『同世代の親同士がすすめる《つながりづくり》』のポイント●

○一人ひとりの人生経験を生かそう

仕事や趣味で得たスキルなどこれまでの人生経験を生かすことで、自己実現につながりイキイキできる。子供との関係にもゆとりが生まれる。

○子供を中心に楽しい活動をつくろう

子供を活動の外に置くのではなく、お互いの子供の成長を喜び合う関係を目指そう。子育て仲間とのつながりの中で親も子も成長し、子育ての楽しみや喜びも増える。

○「お互いさま！」ですすめよう

子供が病気の時や作業中の保育などは、役割をフォローしあい、お互いの子供を預けあうなど、「お互いさま！」で無理のない活動にする。

○保育に預ける、友達と遊ぶなど、親以外の大人（他人の親など）と接する経験をとおして、子供の社会性が芽ばえる。

事例 1 (2)

乳幼児期の子供と親の知り合い広げや気軽な相談対応 (2)子育て先輩が経験を基に提供する “しゃべり場”『きんぎょルーム』

《中野地区(B)の取組》

○かつて子育て中に孤立感やプレッシャーを感じ、家庭教育学級で安心感や自信を得た経験のある子育ての先輩が、自分たちの想いを基に、子育ての後輩のために“ささやかな悩みを打ち明けたり、他愛のないおしゃべりができる空間”を提供する「場づくりのプログラム」として「きんぎょルーム」を開催した。

○専門家ではないが、自身も子育ての嬉しさとつらさを感じてきた先輩だからこそ生み出せる、共感や励ましなどの気持ちに支えられた「気楽で安心できる場所」にするために、様々な工夫が行われている。

●関わった人たち

○子育て支援グループ「きんぎょの会」

現在ほど子育て支援の環境がなかった平成6(1994)年に、中野区教育委員会が主催する乳幼児保護者向けの家庭教育学級受講者の有志が講座終了後に作ったグループ「きんぎょの会」。自分たちが感じていた孤立感やプレッシャーと、講座で安心感や自信を得た喜びの経験を基に、区内の児童館で講座やしゃべり場を提供するボランティア活動を続けてきた。

メンバーの中には、PTA 役員や地域の育成活動に携わる人、民生児童委員などがある。メンバー自身の子供たちはすでに高校生や大学生になっている。

○中野区若宮児童館の職員

会場の提供、「きんぎょルーム」開催の周知に協力など

取組内容

◆周知・広報

お誘いのリーフレットを手作りで作成し、児童館利用者への配布のほか、地域の子ども家庭支援センターや保健所等でも配布。イラストやレイアウトは、メンバーの手書き・手作り。

●手作りリーフレットで、経験から生まれた子育て先輩の言葉が次の世代に届く。

「子育て真っ最中のお母さんたちが求めているのは、ささやかな悩みを打ち明けたり、他愛のないおしゃべりができる自由な空間じゃないのかなあ？」

●リーフレットの配布方法について児童館から助言をもらい、福祉や保健の施設でも配布した。

“きんぎょルーム”

へようこそ！

「子育て真っ最中のお母さんたちが求めているのは、ささやかな悩みを打ち明けたり、他愛のないおしゃべりができる自由な空間じゃないのかなあ？」
「お母さんだって“しゃべり場”がほしいよね！」
そんな自分たちの長年の思いを形にし、子育て中のお母さんたちがふらっと立ち寄れるスペースとしてはじめたのが“きんぎょルーム”です。
どうぞ、お気軽にいらしてください。



“きんぎょルーム”は、地域の児童館などのスペースをお借りし、月に1回程度1年を通して開きます。
(開催時期、場所は年度によって変わります)
参加するための資格や料金はありません。対象は、現在子育て中の方ならどなたでもOKです。



時間は、午前10時から12時くらいまでの間です。
お子さんの体調やおうちの用事を優先させ、無理せずご参加ください。



お母さんたちがお茶を飲みながらおしゃべりしている間、子どもたちは、じまにならないよう目の届く場所でスタッフが見えています。心おきなくおしゃべりを楽しんでください。



話題は「子育て中の、とりとめないあんなこと、こんなこと...etc.」。きんぎょの会のメンバーがファシリテーターとして参加し、おしゃべりの進行を助けます。その他、ゲストをお呼びして楽しいお話を聞く機会もあります。お楽しみに。



「きんぎょルーム」のリーフレット

◆きんぎょルームの開催

- 会場：区内の児童館など
- 回数：同じ地域で1年間、毎月1回程度開催
- ※開催時期や会場は年度により変更
- 時間：10時から12時くらいまで
- 対象：現在子育て中の方、どなたでも
- 参加に資格は不要
- 無料
- 平成22年度は、子育てミニ講座と交互で開催。5月、6月、7月、10月。

●「共感」「励まし」の気持ちに支えられた暖かい場を目指す。

●きんぎょの会のスタッフがファシリテーターになり、お茶を飲みながらのんびりとおしゃべりをリードする。

子供は親の目の届くところでスタッフが見ているので安心しておしゃべりできる。



参加者は少ない時もあるが、「ふらりと立ち寄る」親子もいる。

●「子育ての先輩とおしゃべり」の効用● ～『きんぎょの会』活動報告書より～

○「きんぎょルーム」は、児童館に集まる母親たちときんぎょのスタッフがお茶を飲みながら話すしゃべり場です。話す内容は近況から愚痴、悩みまで、何でもOKです。話したくなければパスもあります。専門家の話を聞かなくても、**ちょっと先輩ママの経験談を聞くだけで、“なーんだ”と思えることが意外にたくさんあるので、その場で心配事が解決することがあったり、人に話をするだけで気持ちが軽くなる**ことがあります。

○時代が変わっても子育ての根本はあまり変わっていません。相変わらず評価されることのない不安な育児の日々は続いています。**誰かの「それでいいんだよ」「がんばってるね!」「大丈夫!」という一言がどんなにママたちを楽にするでしょうか!**

事例 1 (3)

乳幼児期の子供と親の知り合い広げや気軽な相談対応 (3) 小学校の学童クラブ教室を活用 マザーリングの『東玉川子育てサロン』

《世田谷地区の取組》

- 奥沢地区は、大田区と隣接する地域で、周辺に児童館等がないことから、乳幼児期の子供と親が、身近で、気軽に、そして小学校内にあるということで安心して足を運ぶことができ、地域の人に見守られていると実感する場を提供する。
- 「どの子も親も幸せになって欲しい、共に育ち合いたい、子どもは未来からの贈り物…しっかり育てて未来に返すのが大人の責任」との願いから、乳幼児期の子供とその親の居場所を提供する。
- 特に何か行事やプログラムを実施するのではなく、ふらっと子供と一緒に居る場（空間）があって、子供と親がそばにしながら、子供のペースでのんびりした時間を過ごせる場として設ける。

●関わった人たち

- 子育て支援ボランティアグループ「マザーリング」
元幼稚園教諭、栄養士、PTA役員経験者、現PTA役員、元青少年委員などの経験を持つ地域の子育て先輩。自分の子供が乳幼児期の頃、このサロンの参加者だった方もいる。（サロンの運営、小学校との連絡調整等）
- 世田谷区立東玉川小学校（学校運営委員会）
（会場の提供、PTA会員の協力など）

取組内容

◆子育てサロンの概要

世田谷区立東玉川小学校内の子供の居場所活動の部屋（通称：BOP室）を使用し、原則として週1回、火曜日の午前9時45分から11時45分まで開催している。平成21年度は年間36回開催した。

室内での活動を基本に、乳幼児が遊べる遊具を用意し、親子とスタッフが一緒に遊んだり、話をしながら、他の親子と一緒に過ごすことができる時間を提供している。



親子と一緒に遊び、話して、のんびりした時間を過ごす

◆活動開始の背景・経緯等

マザーリングの代表は、元幼稚園教諭であり、世田谷区の遊び場開放委員、青少年委員、PTA役員などの経験から、子育て中の親、特に母親が息抜きできる場の必要性を感じており、サロンの場を設けたいと考えていた。青少年委員として東玉川小学校に頻繁に足を運んでいた平成15年に、校長先生と雑談をする中で、漠然とこんなことをやってみたいと考えていると話したところ、「午前中はBOP室が空いているから使ってみたら」という提案があり、平成16年から月1回、小学生の保護者数名と一緒に開始した。

平成17年に東玉川小学校が文部科学省のコミュニティスクール推進事業校に指定され、学校運営委員会が設けられた。この学校運営委員会では、プロジェクトとして「校内緑化」「学習支援」「読書活動」「家庭教育支援（当時は「子育て支援」）」の4つに取り組むことになり、「家庭教育支援」のうちの一つにマザーリングの子育てサロンを位置付けた。

サロンの毎週開催の必要性を考えて、スタッフの協力を得て、平成21年度から原則として毎週1回、2時間の開催としている。



PTAの用事で学校に来た男性が子育てサロンに顔を出して、乳幼児と一緒に遊ぶことも…

●取組を通してわかった

『小学校を拠点にした地域の子育てサロン』のメリットとポイント●

○学校内にサロンの場所（拠点）を得ることで、多くのメリットが見出すことができた。

- ・乳幼児期の子供とその親が安心して足を運ぶことができる。
- ・活動のための広いスペースが確保できるとともに、サロンで使用する遊具等の置き場所を確保することができる。
- ・母親にとって、自分の子供が将来通う小学校や小学生の様子を見る機会となっている。その結果、子育て先輩であるスタッフから小学生への育ちを見通した現時点の子育てに大切なことを自然と学ぶ機会となっている。
- ・授業の休み時間にサロンの様子を覗きに来る小学生がいて、小学生にとって乳幼児を見る機会となっている。
- ・PTA役員の方が用事があって来校したついでにサロンに立ち寄ることもあり、母親と子供にとって地域の知り合いが広がる機会になっている。また、男性の保護者が来ることもあり、乳幼児期の子供にとって、父親以外の大人の男性と接する機会になることもある。

○東玉川子育てサロンは、学校を拠点にしている点が特徴だが、スタッフの多くが東玉川小学校と関係一例えば、元PTA会長、元職員の栄養士、元青少年委員、現役のPTA役員などを持っており、学校の状況等をよく知っており、さらに学校教職員との信頼関係が築かれている。その延長線上に、現在のサロンの活動がある点が、活動の下地となっている。

事例 1 (4)

乳幼児期の子供と親の知り合い広げや気軽な相談対応 (4)地域の子育て支援ボランティアの 『子育てサポーターの日』

《稲城地区の取組》

○子供と地域のコミュニティを築く取組として、乳幼児の親子同士の交流の場を提供するとともに、その場を通じて、他の親子やサポーターとのつながりをつくる。

●関わった人たち

- 子育てサポーター（活動の企画・運営、全体進行）
稲城市第四公民館主催の「子育てサポーター養成講座」を市報等で知り、申込・受講した方々。子育て経験者が多く、民生児童委員、文化団体会員、ボランティア活動実践者などの経歴を持つ方もいる。
- 子ども家庭支援センター（保育士・臨床心理士の派遣）
- 児童館（当日準備、会場提供、緊急時対応）
- 公民館（必要物品の提供、企画・運営に関する助言等活動支援）

取組内容

◆活動の概要

○市内の5つの文化センター（公民館と児童館の複合施設）の児童館部分を会場にして、それぞれ月1～2回、親子同士の交流ができる場所を提供。

○約90分の時間で、手遊び歌や工作を楽しみながら交流するプログラムの時間と、プログラムのない自由な時間の企画・運営を実施している。



○活動終了後に、参加した親にアンケート「きょうのひとこと」の記入をお願いしている。無記名で、プログラムや運営、子育てで気がかりなことなどを記入していただき、活動終了後に、出席した子育てサポーター全員で読み、次の活動の内容や親子への関わり方等に活かしている。

◆活動の方針

- ①育児中及び出産予定の方が育児が楽しくなるよう努める。
- ②育児中の方の息抜きとなるような雰囲気作りを心掛ける。
- ③新しく参加された方と他の方とのコミュニケーションが図れるよう、つなぎ役になる。
- ④子育てサポーターの日に参加した方が、親同士の交流から地域への交流へと広がるよう、つなぎ役になる。

◆活動の流れ

以下は基本的な流れで、手遊びや絵本などの内容は各館さまざまである。

また、子ども家庭支援センターから保育士や臨床心理士が来て、サポーターとともに、親子とふれあい、交流し、その中で育児相談に応じることもある。

- 9:45 [会場準備] 受付準備、会場清掃
- 10:00 [打合せ] 当日の流れと役割分担の確認
- 10:20 [受付開始]
- 10:30 [前半の活動開始]
 - ①「はじまるよ」の歌
 - ②挨拶・自己紹介
 - ③注意事項の説明
 - ④手遊び歌・絵本・紙芝居
 - ⑤工作・折り紙
 - ⑥自由時間
- 11:30 [後半の活動開始]
 - ①遊具・おもちゃの片付け
 - ②体操等
 - ③「きょうのひとこと」
(アンケート)の記入
 - ④さよなら(またね～)の歌
 - ⑤参加した親子の見送り
- 11:45 [後片付け・反省会]
 - ①「きょうのひとこと」を読み、課題の確認
 - ②活動記録用紙の記入
 - ③次回の確認
 - ④備品等のチェック



サポーターが事前に学び提供するプログラム

●取組を通してわかった

『地域のボランティアがすすめる《つながりづくり》』のポイント●

<乳幼児と親の社会的つながりのきっかけをつくる工夫>

- 乳幼児の月齢などを聞いた時に同学年の親子を紹介したり、とても単純な悩みを聞いた時にその解決方法などを近くにいる他の親にたずねてみるなど、親同士が接点を持つようにしている。
- 公民館がサポーターのスキルアップ講座を行い、親子への接し方やプログラムの充実を図っている。※P43 参照
- サポーターが自主的にマニュアルを作り、サポーター活動に向かう心構えの統一を図っている。

<地域に、安心できる居場所を提供>

- 定期的に開催することにより、地域の乳幼児親子の居場所として定着しつつある。毎月のように参加する幼児がサポーターのことを覚え、帰る時に「またねっ!」と笑いながら手をタッチしてくれるようになった。
- 「きょうのひとこと」で「ここで友達ができました」「楽しかったので、また来ます」と書く親が毎回のようにいる。

事例 2(1)

乳幼児の親に学習の機会を提供する(1) 『きんぎょルーム』の子育て講座

《中野地区(B)の取組》

○かつて子育て中に孤立感やプレッシャーを感じ、家庭教育学級で安心感や自信を得た経験のある子育ての先輩が、自分たちの想いを基に、子育て中の親のために、親の心をほぐし、育児の不安を軽減できるプログラムとして、専門家を招いて「子育てミニ講座」を開催した。

○地域の親同士のつながりづくりにもつながるよう、年間を通して同じ地域で開催し、各回のテーマは《しゃべり場プログラム》の「きんぎょルーム」(※P20)にも関連付ける。主催のきんぎょの会が、各回のファシリテーターを務めた。

●関わった人たち

- 子育て支援グループ「きんぎょの会」
(講座の企画、講師依頼、当日の運営、講座でのファシリテーター)
- 中野区若宮児童館の職員(平成20年度は中野区仲町児童館)
(会場の提供、「子育てミニ講座」開催の周知に協力など)

取組内容

◆周知・広報

チラシを作成し、児童館利用者への配布のほか、地域の子ども家庭支援センターや保健所等でも配布。行政関係の機関へは、児童館から配布を依頼。

◆講座の開催

- 会場：H20年度 中野区仲町児童館
H21年度 中野区若宮児童館
- 時間：10時から12時くらいまで
- 対象：現在子育て中の方、どなたでも
- 受講料：無料
- 保育：基本的に一時保育を実施(無料)
※テーマによっては親子で参加する場合もあり
- 各回テーマの例：(右ページのとおり)

支援合う仲間づくりの講座

part1

人は一人で生きていくことが、とっても難しい。支援合う仲間づくりが、子育ての大きな支えになる。

2010年

1月19日(火) 10:30~12:00

会場：若宮児童館(中野区若宮3-54-7 電話3330-7895/10 掲載)

講師：岩川直樹先生(埼玉大学教育学部教授)

対象：乳幼児の保護者 参加費：無料

※完全保育制となります。(保育定員先着10名)

保育希望の方は、きんぎょの会へ申し込みください。
(tel.&fax: 5380-5307 / e-mail: naoki.rock@kko.biglobe.ne.jp)

主催：きんぎょの会/協力：若宮児童館

※この事業は東京都教育委員会「乳幼児期からの子どもの教育支援プロジェクト」の地域プログラムの試行として実施しています。

■次回の予定■

・2月25日(木) 10:30~12:00 「支援合う仲間づくりの講座 part2」
埼玉県教育実践総合センター 講師 庄司康夫先生



- 一時保育で子供とひととき離れることで、母親がリフレッシュし、子供のかわいさを再認識して、また子供にむきあう元気を得られている。
- 子育て先輩は、単なる企画・進行役ではなく、講師と母親の間の存在になり、母親に共感しながら気持ちを引き出すファシリテーターとしての力量が必要。

◆「子育てミニ講座」の年間テーマ◆

● 6月の講座

「身体が変われば♥心も変わる

～お母さんのためのストレッチとくるまざトーク」

（講師：マタニティー・アフタービクスインストラクター）

※参加者の感想※

- ・久しぶりの運動が気持ちよくてリフレッシュになったし、少しの時間子供と離れるという体験も貴重でした。
- ・みなさんの話を聞いて、悩んでいるのは自分だけではないということがわかり、みんな頑張っているんだ！と、心を入れ替えて子育て頑張ります。

●自主企画講座など、活動を伴う講座はハードルが高い。年度のはじめ（導入）には興味や関心のあるテーマで実施する。

● 9月の講座

「2歳児が憎まれっ子ってほんとう？」

（講師：子ども虐待防止センター理事・相談員）

※参加者の感想※

- ・気持ちがスーッとしました。「自分の性格を大切にしようがいい」という言葉に救われました。
- ・他のお母さんは素敵で自己嫌悪に陥ることもありましたが、みなさんの本音を聞けて救われた気がします。
- ・完璧なお母さんはいないという言葉で楽になった。
- ・みんな手探りで子育てしていると思えてよかった。

●子育ての悩みなど日頃の思いを分かち合う、静かで深いワークショップでは、「お互いに口外しない」というルールのもとで話し、聴くことで、気持ちが楽になり、時に心の叫びにも気づく。語り合うことで救われる人もいるというきんぎょ会の経験から、毎年行なっている。

● 11月の講座

「子どもの《体調（からだ）》のミカタ」

（講師：鍼灸師）

発熱や下痢、嘔吐など、病院に連れて行くべきか母親は日頃悩みがちである。母親の疑問に応え不安を解消するために、家庭での手当てなど、子供の体調の見方についてのわかりやすい講座を実施。



● 12月の講座

「子育ての難問を解決講座 しっかり抱っこでサインがわかる」（講師：助産師、相談員）

※参加者の感想※

- ・普段子供と何気なく接する中でも、見ると育児が楽になる点があり、新しい発見でした。
- ・参考になるお話がきけて勉強になりました。早く知りたかった内容ばかりでした。
- ・ためになりました。赤ちゃんと心を通じ合って成長したいと思います。

● 1月の講座

「コミュニケーション講座(1) この指とまれ！」

（講師：大学教授）

●コミュニケーション講座では、手をつなぐ、背中をくっつけるなどのワークショップを通して、少しずつ参加者同士の心と心が触れ合えるよう工夫した。孤独な子育てに心細さを感じている母親に「人は一人ではないから心を開いて触れ合おう」というメッセージを伝えたい。

● 2月の講座

「コミュニケーション講座(2) 仲間をつくろう！」

（講師：大学教授）

事例 2(2)

乳幼児の親に学習の機会を提供する(2) 子育て世代が企画する子育て講座

《中野地区(A)の取組》

- 乳幼児を子育て中の親たちが、「自分たちが聞きたい話を聞く講座」を企画し、実施した事業
- 同じ地域で子育てをする母親たちが、子育てについて学んだり、地域のつながりづくりの活動を進めるためのグループづくりの一環として実施する。
- 地域の子育ての先輩で、現在は子育て支援活動を行っているグループと、拠点となる地域の児童館職員が実施をサポートする。

●関わった人たち

- 子育てグループ「まんまるママの会」
(講座の企画、講師依頼、一時保育等準備、当日の運営、司会進行等)
- 子育て支援グループ「きんぎょの会」(企画・運営の助言)
- 中野区仲町児童館職員 (会場の提供、運営や周知に協力など)

取組内容

企画会議での意見
…これが今の
ママの気持ちです

◆企画会議と準備 1月～

- ①呼びたい講師のリストアップ
- ②資料を持ち寄り、講師候補決定、交渉
- ③テーマを検討
- ④チラシの作成、配布
- ⑤一時保育者の依頼
- ⑥申込み受付(児童館が協力)
- ⑦当日運営の役割分担 など

- ・子育ての毎日を、前向きに元気よくがんばれるようなお話し
- ・子育てでくじけそうになったときに励ましてもらえるようなお話し
- ・肩の力を抜いてもいいんだ…と思えるようなお話
- ・子供を預けてゆっくり聞きたい

◆講座の開催 4月

「ゆるむ育児のすすめ」

- ・講師：大葉ナナコさん
(バーソコディネーター)
- ・会場：中野区仲町児童館
- ・参加費：無料
- ・一時保育：先着順で25名まで(無料)

- 一時保育については、子育て先輩グループ「きんぎょの会」がアドバイスし、保育の案内チラシや保育者との打合せ等実施した。

※参加者の感想※

- ・楽しく元気の出るお話。とても参考になり勇気づけられました
- ・久しぶりに一人で笑いました。子育ては辛いと感じると損かもしれません。楽しくやっていたころと思いました
- ・素敵な講座でした
- ・自分を励ましてくれたような話でした。感動しました
- ・あたたかい時間を、ありがとうございました
- ・育児ストレスが溜まりやすく第二子も迷っていましたが、力強く前向きに考えられるようになりました。ゆるむことが大切なんですね

事例 3

子育てに関するヒントの提供 「子育てのヒントカード」

《世田谷地区の取組》

子育てサロンの場で、親といろいろな話をしている、子育てに関する相談をされることがある。その悩みの内容は、子育て経験のある方からすればそれほど気にすることではないことが少なくない。そんなときに「こんなふうに考えたらどう？」とか「こう言われているのよ」と子育てのヒントやポイントをカードにしたものを作成し、説明しながら渡している。

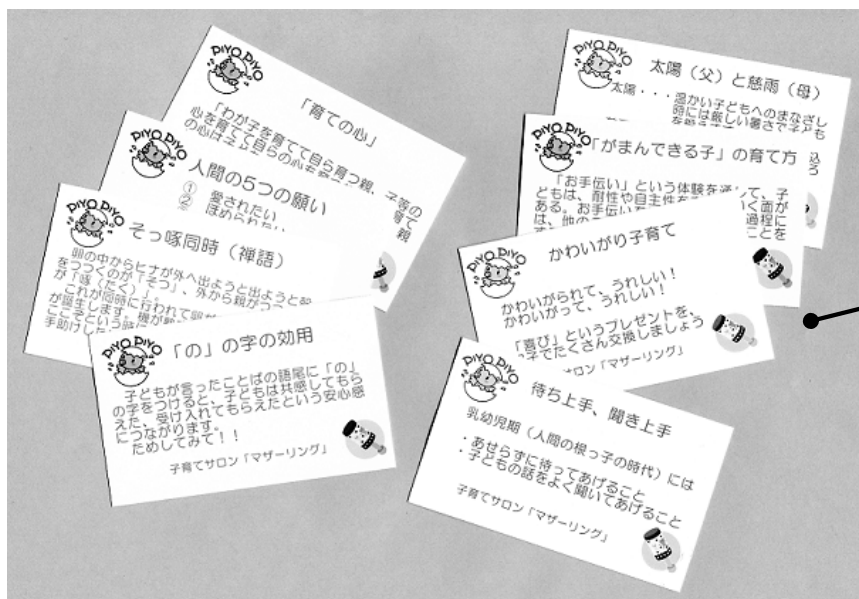
取組のポイント

○世田谷地区の「マザーリング」のスタッフは、誰もが子育て経験者であり、また、元幼稚園教諭、栄養士などの経歴を持つ方がいることから、子育てのヒントカードは、自身の経験から学んだこと、専門的知識を踏まえたもの、昔からの言い伝え、教育学・保育学等研究者の言葉等をえりすぐって、簡潔にまとめて作成している。

○カードは、カバンや財布などに入れておいて、何かのときにすぐに見ることができるよう、名刺サイズにしており、パソコンでプリントして作成している。

○親への渡し方は、サロンのスタッフとして親と接する時に心構えと同様に、子育てに関する悩みの聞き役に徹することを基本にしつつ、カードを渡すことそのものも、カードに書かれている内容も押し付けることはしないようにしている。

▼名刺サイズのカード8枚で1セット、小さなビニール袋に入れて渡している



子育て先輩の経験
からアドバイス

「の」の字の効用

子どもが言ったことばの語尾に「の」の字をつけると、子どもは共感してもらえた、受入れてもらえたという安心感につながります。ためしてみてください!!

(カードより)

事例 4

親同士の自主的なグループ作り ～親同士がつながるためのしかけとして～

《中野(A・B)地区の取組》

住民の転入・転出が多く核家族世帯が多い都心部では地域の住民同士の付き合いが少なく、子育ての経験の少ない乳幼児の親は孤立しがちで、悩みや不安を抱えて子育てをしているのではないだろうか。地域の児童館において、身近で気軽に子育ての相談相手や子育て仲間をつくり（知り合いを広げ）、子育ての悩みや不安を軽減し、乳幼児期の家庭教育を行なう力をつけるための手法開発として取り組んだ。

●関わった人たち

- ① 地域の子育て先輩：子育て支援グループ「きんぎょの会」（講座などの企画、実施、仲間づくりの声かけ）
- ② 地域の拠点施設：中野区仲町児童館職員（日常的な親子との関わり、地域の子育て支援者とのかけはし）
- ③ 支援チーム助言：中野区の社会教育主事

子育て中の孤独感を経験した先輩が、共感や励ましの気持ちで接することがポイント！

取組内容

① 出会う 5月～11月

子育て講座の実施を通して、地域の若い親と“知り合い”になる
（学習機会の提供として実施 講座内容は P26）

● 専門家ではない子育ての先輩が講座を作る姿が、若い親にとってのモデルに

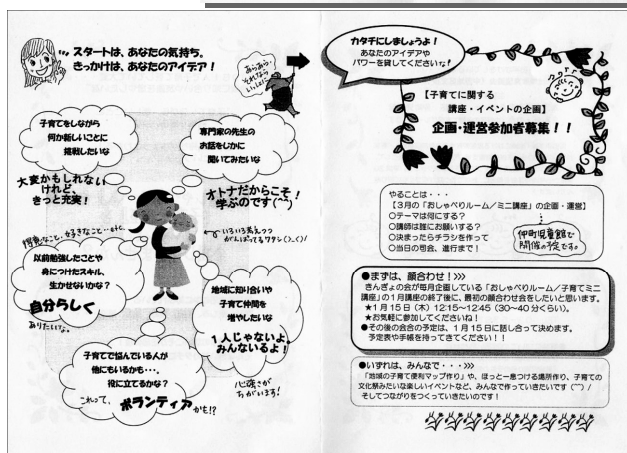
② 誘う 12月

講座終了後にリーフレットを配り、参加を誘いかける

● 児童館の職員が日頃の関わりの中で、背中を押す声かけ。『やってみたら？』など

③ 知り合う

1月～2月
コミュニケーション講座で思いを共有する素地をつくる（2回）



- (1) 『この指とまれ』 「人は一人じゃないから、もっと心を開いて触れ合おう。」自分たちの経験からくるそんなメッセージを、孤独な子育てに心細さを感じている母親たちに伝えたい。指導：埼玉大学教育学部 岩川先生。
- (2) 『仲間をつくろう!』 “思いを届けて仲間を作る”ことを目指したワークショップ。心とからだがほぐれてくると一人ひとりの個性が発揮されはじめて、お互いの距離が近づく。指導：埼玉大学教育実践総合センター 庄司先生。

事例 5

親になるための学びのプログラム サポーター＋乳幼児親子＋中学校で 『親育ち・子育て講座』

《稲城地区の取組》

○思春期の中学生が乳幼児とふれあうことで、命の尊さを学び、親が自分を大切に育ててくれたことにあらためて気づく機会を提供する。

●関わった人たち ～連携・協力団体とその内容～

- 子育てサポーター
(企画、妊婦疑似体験、赤ちゃん・母親とのふれあい交流の指導補助)
- 稲城市立第二中学校
(授業時間の設定・進行、生徒の誘導、会場・機器の準備)
- サポーターの日に来る親子
- 公民館（教育委員会）
(学校との調整、親子の送迎、講師対応など)

取組内容

◆講座開始の背景・経緯等

- 平成 19 年度に、稲城市地域家庭教育推進協議会と第四公民館の連携により、「次世代育成」の一環として、明日の親となる中高生の子育て理解講座として実施した。
- 平成 20 年度からは、稲城市子育てサポーターと第四公民館が連携して実施している。
- 平成 20 年度は稲城市立第四中学校(3年生対象)、平成 21 年度は稲城市立第二中学校(2年生対象)で実施。

◆講座の概要

- 実施会場：稲城市立第二中学校
視聴覚室及び2年生の教室
- プログラム・内容：
 - ・稲城市立第二中学校の3・4時間目の家庭科の授業で、2年生を対象に実施した。
 - ・3時間目(10:50～11:40)
「生命の誕生にまつわる話」
講師 永野 清歌(バーズコーディネーター)
 - 4時間目(11:50～12:40)
「妊婦疑似体験、赤ちゃん・母親とのふれあい交流」



◆講座（授業）の様子

- 最初は遠巻きに見ていた中学生も、順番で赤ちゃんを抱っこしているうちに表情が柔らかくなり、帰るときには「バイバイ」と言いながら手を握ったりするようになる。日頃小さな子供と接する機会のない中学生には大きな経験になっていると考えられる。

◆中学生の感想から（平成 20 年度）

- 私は赤ちゃんをまだ抱いたことがなくて、どーやって抱けばいいかわからなくて、大変だったけど、赤ちゃんがかわいくて、私にとって赤ちゃんとのふれあう時間はとても楽しかったです。
- 自分の基が 0.2mm 程度の物体だった事を知って、驚きました。こんなちっぽけな物体が、今の自分になった事を考えると命ってすごいなと思いました。頑張っ産んでくれた親に感謝して命をより一層大切にしたいと思いました。



◆お母さんの感想から（平成 20 年度）

- おそろおそろ触れる子もいれば、抱っこに慣れた男の子もいて小さい子供と関わる環境の有無によってこんなにも違うものかと驚いた。母親になってすぐ抱っこしても怖々だったから、中学生なら尚更、近づくのも怖かったかもしれない。又、思春期ならではの男の子の反応（無関心を装う）がちょっとおもしろかったです。生命の大切さを学ぶお手伝いのできたのであれば、幸いです。

●講座の取組を通してわかった、このプログラムのポイント●

<直接のふれあいが、心に響く学びを生む ～“慈しむ気持ち”～>

- 思春期を迎え自分の身体にも変化がある時期の中学生が、母体のしくみ、生命の誕生、胎児の成長、新生児・乳幼児の発達などについての科学的な講義を聞くプログラムと、実際に 1 歳前後の乳児・幼児と、その母親に接するプログラムの二つを通して、生命誕生の科学的な知識を得ると共に、生命の尊さを心で感じ、学ぶことができる内容となっている。
- 「赤ちゃんを持ち上げてみたら、軽く首が傾いていました。命の重みを感じました」「赤ちゃんの髪の毛がとても柔らかかった。手が小さかった」・・・感想文からは、どの生徒も、自分より小さな生命に感動し、慈しみ愛情を持って接していることがわかる。「大人になったときにためになると思う」「将来の勉強になった」など、やがて自分も子供を産み育てることを考えた生徒もいた。

<自分を大切に、命を大切にする学びにつながる>

- 「針穴の大きさ」の生命の誕生から現在の自分までの成長・発達についての講義や、子供を大切に育てる母親たちとの直接のふれあいを通して、自分が「大切に育てられた」ということを感じる事ができる講座である。

<参加する乳幼児の親にとっても学びがある>

- 乳幼児の母親は地域の中学生に対して漠然と「怖い」というイメージを抱く人もいたが、子供に接する様子を見て、「優しい」「頼もしい」「大きくなったらこうなるのね」と感じる方が多く、乳幼児の親にとっても学ぶ機会となっている。

事例 6(1)

家庭教育支援チームの活動のPR・発信(1) 活動記録の作成

《中野地区(B)の取組》

○家庭教育支援チームとして取り組んだ事業の記録を作成し、支援チーム活動の理解促進や、活動充実を図ると共に、他地域における支援チームづくりを促す。

●関わった人たち

- 子育て支援グループ「きんぎょの会」(事業の実施主体)
- 中野区仲町児童館職員 (事業実施に協力)

取組内容

◆事業実施のつど、記録する

- ・記録担当者を決め、事業内容を記録する
- ・毎回、参加者に感想記入を依頼する
- ・事業の様子がわかる写真を撮影しておく

◆活動記録(活動報告書)を作成する

「つながりづくり・仲間づくり ～ママの出会いの輪をひろげて～」

- ・実施講座の一覧
- ・各講座の概要、参加者の感想
- ・主催したグループの紹介と活動経歴 など

※活動のために助成金を得ている場合などは、助成金事業の報告書として作成することがある。

イラストは
メンバーの
手書きです



H20 年度活動記録(表紙)



●「活動記録」の役割●

○自治体にとって

これから支援チームをつくり、地域における乳幼児と親の教育支援を進める地域にとってのよいモデルとなり、広域的に支援チーム活動の促進につながる。

○グループ・団体にとって

自分たちの支援チーム活動の理解を得たり、支援のネットワークを広げる際のPRツールとなる。

事例 6(3)

家庭教育支援チームの活動のPR・発信(3)

子育てサポーターの「子育て応援フェスタ」

《稲城地区の取組》

○乳幼児期の子供のいる家庭を対象に、子育てサポーターの活動のPRを図るとともに、市内の子育て支援を行っている保育園、幼稚園、子育て支援グループ等の情報提供を行うため、誰でも参加できるイベントを実施する。

●関わっている人たち

実施に当たっては、子育てサポーターを中心にした実行委員会を組織している。

- ・実行委員会（子育てサポーター）：事前準備、企画・運営
- ・子ども家庭支援センター、保健センター（相談コーナーに保育士・保健師を配置）
- ・市内の幼稚園・保育園（パンフレット、プレ入園の案内、園庭開放の案内等の提供）
- ・児童民生委員（情報コーナーの案内等を担当）
- ・市民活動サポーターセンター（イベントを情報誌に掲載）
- ・読売新聞（グッズの提供）
- ・市立中学校の生徒（ボランティアとして受付、会場誘導、フリータイムで親子とふれあいながらのお手伝い）
- ・公民館（会場予約、物品の提供、実行委員会の事務局）

取組内容

◆イベントの概要

○実施日：平成21年11月28日(土)

○実施会場：稲城市地域振興プラザ

○主なプログラム・内容：

- ・子育てのお話「うたって あそんで 笑顔のあふれるひとときを!!」
講師：ひらお保育園園長 田中さん
- ・サポーター活動のPR
- ・展示コーナー、情報コーナー
- ・工作コーナー～紙風船とくるくるこま～
- ・保育士、保健師さんに聞いてみよう！
- ・サポータータイム
～大型絵本&パネルシアター～
- ・ジャンケンゲーム&サンサン体操 など

ひとりじゃないよ！みんながいるよ!!



いつも「サポーターの日」でやっている手遊びを紹介してPR

●イベントの成果●

- 展示や実演によりサポーターの日の趣旨、雰囲気等を伝えることにより、サポーターの日の認知が広がり、後日、参加する親子も増えている。
- 市内のさまざまな子育て支援に関する情報提供の機会となっている。
- 引っ越してきて間もない家庭や出産間近の親も参加しており、子育て支援情報を入手したり、サポーターの日に参加するきっかけになっている。
- 実行委員会を組織し、多様な機関・団体の協力を得て実施していることから、子育てサポーターの会としてもネットワークを広げる機会になっている。



事例 6(4)

家庭教育支援チームの活動のPR・発信(4)

「子育てサポーターのしおり」の配布

《稲城地区の取組》

○乳幼児期の子供を持つ親をはじめ、さまざまな人々に子育てサポーターの活動を理解していただき、「サポーターの日」に参加するきっかけとしてもらうために、「子育てサポーターのしおり」を作成している。

取組内容

◆しおりの概要

- 掲載している内容は、子育てサポーターの活動目的と内容、活動場所の案内図、市内の相談機関の連絡先などを掲載している。
- A6判8ページ(カラー刷)
- 子育てサポーターの日に初めて参加する親に目的や内容を説明しながら渡している。
- 公民館、児童館、保健センター、子ども家庭支援センターなどに配布し、PRしている。



サポーター活動の目的と内容

サポーターは、子育て中の方々のために、少しでもお役に立てればと、以下の4つの目的で、活動を続けております。

1. 育児中および出産予定の方が、『子育てサポーターの日』に参加することで育児が楽しくなるように努めています。
2. 育児中の方の息抜きの場となるような雰囲気づくりをしています。
3. 新しく参加された方が、ほかの方とコミュニケーションを図れるよう、つなぎ役になります。
4. 『子育てサポーターの日』に参加した方が親同士の交流から地域での交流へと広がるよう、つなぎ役になります。

内容は、次のとおりです

10:30 活動開始

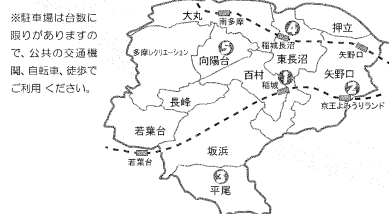
- * サポーターの自己紹介・参加者の自己紹介など
- * 手あそび歌や絵本の読み聞かせなど
- * 自由時間(30～40分程度)に工作をしたり、サポーターやお母さん同士で話をする

11:45 終了

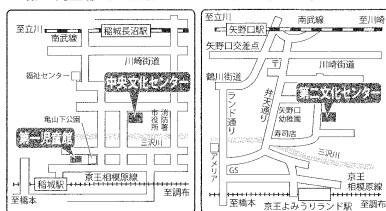
稲城市子ども家庭支援センターの臨床心理士と保育士が、交代で随時、活動場所に来て相談を受けています。詳細は子育てサポーター事務局(第四公民館内)迄、お問い合わせください。

活動場所案内

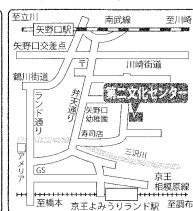
サポーター活動場所である各文化センターの位置を番号順に表示しました。



① 中川文化センターと第一児童館(第二保育園2階)



② 第二児童館(第二文化センター内)



④ 第四児童館(第四文化センター内)



⑤ 第五児童館(第五文化センター内)



○各地域で実施されるサポーター活動について、等しく正確に伝え、理解を得ることができる。

施設名	電話番号	備考
第一児童館(第二保育園2階)	377-8712	開館日時 (休館日を除く)
第二児童館(第二文化センター内)	378-0567	月・土曜日 午前9:00 ～午後5:00
第三児童館(第三文化センター内)	331-0230	(サポーター活動は 午前10:30 ～11:45です)
第四児童館(第四文化センター内)	377-4406	
第五児童館(第五文化センター内)	379-5411	
稲城市役所(本庁舎)	378-2111	
子育て支援課	内線233 234	一階保育 児童発達支援の窓口
経済生活課生活係	内線272	法律・交通事故 等の相談など
稲城市子ども 家庭支援センター	378-2112	女性の悩み相談 (DVなど)
稲城市保健センター	378-6366	子育て相談等
稲城市消防署 (救急テレホンサービス)	378-3421	相談、予防接種、 相談等
稲城市立病院	377-7119	24時間受付
稲城市ファミリー サポートセンター (稲城市社会福祉センター内)	377-0931	
	378-5551	子育て援助を 受けたい方

事例 7

地域の連絡会等への参加 「奥沢地域子育て支援者情報交換会」への参加

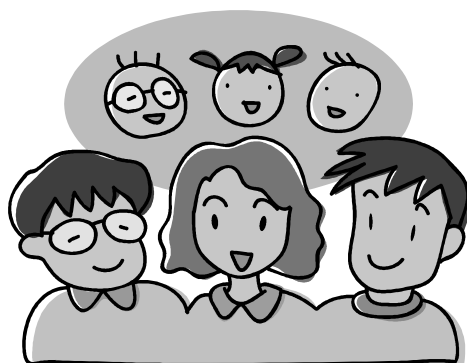
《世田谷地区の取組》

○世田谷区奥沢地域の子育て支援に関連する情報を相互に共有・交換することを目的に、奥沢子育て児童ひろばを所管する世田谷区等々力児童館が主催し、6月・2月の年2回、行われている情報交換会に参加している。

取組内容

◆地域の子育て関係者の相互理解と情報共有

○この情報交換会には、等々力児童館館長、児童ひろばの代表、奥沢地区内の子育てサロンを主宰している民生児童委員、世田谷区社会福祉協議会玉川地域社会福祉協議会事務所職員や個人など、行政職員や民間団体（住民ボランティア等）が参加している。



○情報交換会では、それぞれの団体の活動状況や、抱えている課題について、リラックスした雰囲気
で情報交換や話し合いをしている。特に、子育て支援に関する行政動向、奥沢子育て児童ひろばの利用状況や利用される親子の様子などが提供され、最近の親子、家庭の状況などについて情報交換を行っている。さらに、それぞれが作成する資料や催し物の案内ちらしなどを持ち寄り交換し、会議後の活動の場面で、お互いに区民への周知や紹介をしている。

○出席者が行政の立場、ボランティアの立場等さまざまなので、お互いにやっていることとできることの相互理解が進むとともに、それぞれの活動の特徴・持ち味を踏まえた奥沢地域の子育て支援の全体像を考えることができる場となっている。

○また、奥沢子育て児童ひろばが年1回（8月）開催する「ミニミニ夏まつり」では、この情報交換会に参加する団体等が準備やPR、当日の受付、運営等関わっている。

●地域の情報交換の場に参画することのメリット●

○奥沢地区で実施されている子育てサロンは、運営者、場所、規模など、いろいろなタイプがあり、「親の選択肢が広がったり、使い分けができる」という点で、お互いにその良さを認め、それぞれがいいという認識に立てる。

○情報交換の際には、それぞれのサロンに関わるスタッフの年齢層が異なることから、お互いに経験や知識を教え合う関係、場となる。

○こうしたことから、自分達の活動が自己満足に陥らず、活動のありかたを見つめる機会となる。

事例 8(1)

家庭教育支援チーム運営上の工夫(1) メーリングリスト&記録ノートの活用

《中野地区(A)の取組》

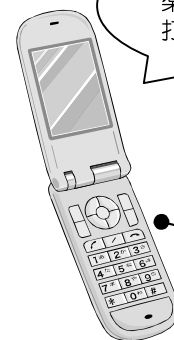
- 中野地区（A）で試行的に取り組んだ支援チームは、中野区仲町児童館を拠点として、同じ地域で子育てをする母親たちが、子育てについて学んだり、地域のつながりづくりの活動を進めるために、現在乳幼児を子育て中の親たちがつくったグループ「まんまるママの会」を中心とした、当事者が相互に支え合いながらつながりを作っていこうとする形態の支援チームである。
- 支援チームのメンバーはみな、1歳～3歳くらいの子供がいて、子育ての生活パターンもさまざまであるし、子供の体調や家事などで、なかなか全員が集まって打合せを行うことが難しい。
- そこで、事務連絡や、打合せ欠席者への伝達、企画の相談などのコミュニケーションの方法として、①携帯電話でのメーリングリスト機能を使用し、日常的に連絡を取り合う ②記録・連絡ノートを作り、欠席者への打合せ事項等のフォローを行う、という体制をとり、忙しいながらも無理をせず共通理解を図る工夫を行っている。

取組のポイント

◆携帯電話は身近で手軽なコミュニケーションツール

【携帯電話でメーリングリスト機能を使用するメリット】

- ・乳幼児を子育て中の世代の多くの人にとって、携帯電話は身近な通信手段なので、気軽にチームの活動に参加できる
- ・一箇所に集まる必要がない
- ・メンバー全員に、一斉に伝達できる
- ・時間帯に関係なく連絡を伝えることができる
- ・活動や話し合いに欠席した人へも、等しく連絡できる



絵文字入りで
楽しくかわいく♪
打合せ～

◆まんまるママ連絡ノートを作成し、 立ち寄ったときに確認

- ・会議や打合せの記録用ノートを兼ねて、話し合った事項を書き綴っておく
- ・打合せ欠席者も、児童館に来た時にノートを確認して、共通理解を図ることができる
- ・ノートは児童館の協力により、館内に置き常時閲覧できるようになっている

- ・「次回の日程です。集合は10時です♪」「楽しみですね!」
- ・「役割分担を決めました。よろしくね。」「了解。がんばりま～す!」
- ・「子供が病気で行かれません、ごめんね!」「お大事にね～!」

事例 8(2)

家庭教育支援チーム運営上の工夫(2) 運営会議等の開催

《稲城地区の取組》

○稲城市内5つの児童館で、毎月1～2回活動をしている「子育てサポーターの日」の運営について協議する場として、「運営会議」と「全体ミーティング」を設けている。

取組内容

◆協議の内容と会議の開催形態

○「運営会議」は5つの会場の代表が集まるもので、月1回開催している。協議内容は、5つの会場の「子育てサポーターの日」に出席する乳幼児や親の様子などの情報を交換・共有することと、次の「子育てサポーターの日」に統一して実施するプログラムの進め方や内容を協議している。



○「全体ミーティング」は、子育てサポーター全員が集まるもので、月1回開催している。協議内容は、運営会議の結果を踏まえ、各会場の様子や、出てきた課題について話し合っている。また、次回の「子育てサポーターの日」に行う折り紙や手遊び歌の練習も行っている。



○「運営会議」、「全体ミーティング」の会場は、ともに原則として中央公民館を会場にしており、2時間30分程度の会議を実施している。

●運営会議等を開催することの効果●

○5つの会場が、それぞれ特色を持って活動をすることは大事であるが、一方で稲城市全体として統一しておくべきことが確認できること、そして、他の会場のことを知ることで、自分の会場の活動がマンネリ化しないよう、改善しようとするのがメリットと考えられる。

○全体ミーティングに子育てサポーター全員が出席することはなかなか難しいが、皆が同じものを共有するためには大きな意味がある時間となっており、結果的に相互研さん、研修の場となっている。

事例 8(3)

家庭教育支援チーム運営上の工夫(3) 活動マニュアルの作成・携行

《稲城地区の取組》

○子育てサポーターが、同じイメージを抱いてサポーター活動に取り組めるよう、心得や「子育てサポーターの日」の活動の例を記した「活動マニュアル」を作成している。

◆「活動マニュアル」概要

- 子育てサポーターの目的、心得、子育てサポーター活動の一例などを掲載している。
- A6判8ページ（一色刷り）

子育てサポーター

活動マニュアル

稲城市

サポーターとしての心得

＜稲城市の子育て支援の一翼を担うサポーターとしての心得＞

- ・サポーターは相手を尊重し常に謙虚であること、また参加者とは対等な関係を築き活動に取り組むこと。
- ・サポーター同士も、お互いに尊重しあい対等な関係を保つこと。

サポーター活動をするにあたって

- ① サポーターエプロンを掛けたときから、心のスイッチを切り替え、サポーターとして心に余裕を持って活動に取り組む。
- ② 人と人との出会いを大切に、サポーターは常に笑顔で対応する。
 - ・受付で迎えるとき笑顔で挨拶する。
 - ・特にはじめての参加者には心配りをする。

－ 2 －

- ・孤立している人を見つけたら気遣う。
- ・親同士でも交流できている場合は見守る。
- ・活動は強制しない。
- ・帰時も笑顔で見送る。

- ③ まず、相手の話を聞く。（ゆっくり傾聴）
 - ・聴き役に徹する。
 - ・サポーター側から参加者の個人情報聞き出すことはしない。
 - ・専門的な相談を受けた時は、稲城市子ども家庭支援センターや保健センター等も紹介する。（常にパンフレットを用意しておく）
 - ・自分の経験や考え方を押し付けない。
- ④ 守秘義務を守る。（サポーター活動で知りえた個人情報は一切口外しない）
 - ・サポーターと参加者の信頼関係を損なうことになるので守秘義務を徹底する。
- ⑤ 原則としてサポーターは自己開示しない。

－ 3 －

子育てサポーター活動の一例

9:45…会場準備

- ① 受付に名札と名簿を用意
- ② 工作用の紙・CDデッキの準備
- ③ 会場の清掃

10:00…打ち合わせ

- ① 当日の役割分担と流れの確認
- ② 当日の折り紙や工作のサンプル確認

10:20…受付開始

- ① リピーターには出席簿に〇印を記入、名札をつけてもらう。
- ② 初参加者には名簿に氏名等を記入してもらい、セット式を渡す。

10:30…サポーター活動開始

- ① はじまるよの歌
- ② 挨拶・自己紹介

－ 4 －

③ 注意事項を話す。

- ④ 手遊び歌・絵本・紙芝居
- ⑤ 工作・折り紙
- ⑥ 自由時間

- ・傾聴
- ・子どもと遊ぶ。
- ・参加者同士が交流できるようにつなぎ役になる。

11:30以降…

- ① 遊具おもちゃ等の片付け
- ② 体操等
- ③ アンケートをお願いし回収
- ④ さよなら（またね）の歌
- ⑤ 参加した様子を見送る。

11:45…反省会

- ① アンケートを読み課題を確認
- ② 記録用紙の記入
- ③ 次回の確認・活動予定者の把握
- ④ 備品のチェック

－ 5 －

●編集の意図と活用法●

○サポーターの人数が40名を越えるほど増える中、全員が共通の意識、考えを持って活動できるよう、活動の際には全員が携行している。

○活動する上で何か困ったことが起きたとき、自分達の活動の原点、基本として見るよう、心がけている。

事例 8(4)

家庭教育支援チーム運営上の工夫(4) チームのスキルアップ《パネルシアター講習会》

《中野地区(A)の取組》

○同じ地域で子育ての悩みや楽しさ、嬉しさを分かち合える仲間づくりの活動として取り組んでいるお誕生会のプログラムを充実させ、子育て仲間の輪を広げるために、親子で楽しめるパネルシアターについて学び、スキルアップをはかる。

●関わった人たち

- 子育てグループ「まんまるママの会」
(講習会の企画、一時保育等準備、講師打合せ、ワークショップの準備等)
- 中野区教育委員会社会教育主事(地域人材から講師の紹介)
- 中野区仲町児童館職員(会場及び道具の提供)

取組内容

真剣な作業の様子
「ものづくりっ
て、楽しい〜♪」

◆スキルアップ講座の実施

「パネルシアター講習会

～楽しく子育て仲間の輪を広げよう～

- ・対象
まんまるママの会、支援チームメンバー
- ・内容
講師による実演と講義
パネルシアターの特徴、上演のポイント、
いろいろな作品紹介
お誕生会向けの作品を作ろう
- ・講師
宮内 玲子さん(パネルシアター COCO ナッツ)



区の社会教育主事に紹介された講師の宮内さんは、中野区の巡回保育に参加してパネルシアターに出会い、子育てと仕事をしながらパネルシアターを上演し続けてきた方。子育て先輩のイキイキとした活躍ぶりは、まんまるママの目指すところと重なり、パネルシアターのスキル以外にも多くのことを教わった。



- スキルが身につくと、活動の幅が広がり、いっそう楽しくなる。
- パネルシアターは、親子で楽しめるプログラムなので、この活動に最適。作品も増やしていける。
- ものづくりの作業は和気あいあい。イキイキと楽しめる。

事例 8(5)

家庭教育支援チーム運営上の工夫(5) スキルアップ講座

《稲城地区の取組》

○現在活動している子育てサポーターが、その資質や活動に必要なスキルを高めることを通して、充実したサポーター活動となるよう、講座を実施する。

取組内容

◆スキルアップ講座の企画の方針

子育てサポーターの活動に必要な手遊び歌、身の回りのものでできる工作、絵本の読み方などのスキルを高める内容とするとともに、子育てサポーターの活動の今後の方向性を考える機会とする。

◆スキルアップ講座の企画等

- 公民館が実施主体
- 子育てサポーター養成講座を受講後、実際に子育てサポーターとして活動する市民を対象に実施
- 講座の内容について、すでに活動している子育てサポーターの要望等を踏まえながら、企画を行う。講座運営の際には子育てサポーターも協力する。



◆スキルアップ講座の内容等

○テーマ・講師等（平成21年度）

回	テーマ等	講師等	会場
第1回	○オリエンテーション 【講義】 ○サポーター活動について	北区育ち愛ほっと館 永田陽子	中央公民館
第2回	【講義】 ○子育てサポーター活動の自主的な運営について	第四公民館職員	中央公民館
第3回	【講義】 ○子育てサポーター活動のボランティアのあり方について	北区育ち愛ほっと館 永田陽子	中央公民館
第4回	【見学・実技】 ○サポーターの今後について	第四公民館職員	中央公民館
第5回	【講義と話し合い】 ○来年度の活動と運営の方針について	第四公民館職員	中央公民館

※時間は各回とも2時間。

第5章 地域で乳幼児期からの教育を支援するために

地域における乳幼児とその親・保護者の社会的なつながりづくりに取り組んでいただいた4地区の方々にお集まりいただき、取組内容や取組のポイント、課題などについてお話いただきました。

【出席者】

中野地区部会(A)プログラム検討委員	中野区仲町児童館館長兼 中部地域子供家庭支援センター所長	三木恵子さん
中野地区部会(A)プログラム検討委員	中野区仲町児童館職員兼 中部地域子供家庭支援センター職員	八田恵美子さん
中野地区部会(B)プログラム検討委員	子育て支援グループ「きんぎょの会」	上原信子さん
中野地区部会(B)プログラム検討委員	子育て支援グループ「きんぎょの会」	関口敦子さん
世田谷地区部会プログラム検討委員	子育て支援グループ「マザーリング」	山城文子さん
世田谷地区部会プログラム検討委員	子育て支援グループ「マザーリング」	内尾奈緒子さん
稲城地区部会プログラム検討委員	稲城市子育てサポーター	木戸宏子さん
稲城地区部会プログラム検討委員	稲城市第四公民館職員	山路孝さん
コーディネーター	大正大学教授	西郷泰之さん

【西郷】今日は、4地区それぞれの取組をご報告いただきます。早速ですが、中野地区(A)の取組から順番に概要についてお願いします。

乳幼児の母親が孤立している現状を踏まえて仲間づくりを進める。

【八田】中野では、平成20年10月、仲町児童館内に中部地域子供家庭支援センター(以下、「地子セン」)を開設し、その中で、子育て広場の充実など地域の母親の居場所づくりに取り組んでいます。

今、相談したいことがあっても言えなかったり、聞ける人がいないという不安を抱えて児童館に遊びに来ているお母さん達が多く、親、特に母親が孤立している現状があります。地子センでは、お母さん達の悩みとか、困っていることに対してのアドバイスをしたり、お母さん達に、ストレッチ体操や離乳食関係のことなど様々な講座を提供しています。地子センに、毎日来るお母さん達もたくさんいて、平日は10時から18時まで子供と一緒に飲食できる「ほっとルーム」という乳幼児専用のルームで1日過ごして帰る方もいます。

そんな中、平成20年度に、子育て支援グループ「きんぎょの会」と一緒に、児童館で子育て講座や仲間づくりに取り組みました。参加したお母さん達は、先輩のお母さんとの出会いの中で、いろいろなことを感じたようで、タイミングを見て仲間づくりを働きかけると、自分達も何かやっていきたい、自分達のつながりを強くしていきたいという声が出てきました。

講座をしてみたいとか、子供の健康に関することを何かできないだろうかと、生の声が出てきて、お母さん達は、グループを「まんまるママの会」と名付け、具体的に自分達の出番ややり方などを話し合いました。

最初に、“バースコーディネーター”の話を聞く会をやることになり、平成21年4月に「ゆるむ育児のすすめ」というテーマで、初めての講演会を実施しました。皆で役割分担をし、終了後にはアンケート集約もして、自分達の力でできたという、大きな充実感、満足感があったと思われます。その後、月に1、2回準備をしたり、話し合いをしたりして、活動を続けています。小さいお子さんを抱えながらなので、子供の具合が悪くなったりして、なかなか続けて出てこれないこともあるので、そんなに縛りがきつくなく、けれどもみんなと一緒にやっていけるといいね、という雰囲気で無理のない形で進んでいます。



八田恵美子さん

お母さん達は、少しずついろいろなことができるんじゃないかという感じになってきて、次には「子供達のために自分達が主体となってお誕生会を開きたいね」という話が出て、当日の司会進行も自分達で進め、体操をしたり、パネルシアターをしたり、歌を歌ったり、誕生月の子供を紹介したりしながら進めました。その後、2～3カ月に1回お誕生会を開いています。8月には、区の健康推進課との共催で化粧品会社の美容講座も開催しました。

子育て広場に遊びに来ている人たちにも「みんなで一緒にやろうよ」と声をかけたり、お誕生会の準備を一緒に手伝ってもらったりしながら、「まんまるママの会」とのつながりを広げています。

10月にはハロウィンパーティーを開催しましたが、企画や内容、用意するものまですべてお母さん達が決めました。進めていると、チラシづくりがすごく上手だったり、お面づくりが上手だったり、衣装をつくったりと、いろいろな分野で得意なものを持っているお母さんがいて、それぞれが自分の得意なことを充分発揮して、やり終えた後のすごくうれしそうな顔が印象的でした。

お母さん達は、自分達でできることがすごく増えてきて、満足度は上がってきています。そして、「まんまるママの会」でいろいろな活動をして、仲間としてのつながりが強くなってきました。1歳～3歳ぐらいのお子さんを持っている方が中心ですが、いつもは子育て支援でいろいろと周りに手伝ってもらったり、助けてもらったりしているけれども、自分達が中心となってやっていきたいという気持ちもすごくあるようです。区主催の子育て支援者のための連続講座にも、「まんまるママの会」の何人かが、「自分達も子育て支援者側に回る視点でものを見て、考えていけばいいな」と参加しています。

【三木】今は子育て支援がかなり手厚くて、支援してもらうのが当たり前みたいな感覚があり、何かやりましようと言うと、こんなことをやらされると苦情を言われるような状態で、こういう主体的なグループができるとは思っていなかったのです。今回は、前年にきんぎょの会の取組を仲町児童館でやってもらって、先輩方のいいモデルを見たということがあると思います。

「仲間っているといいね」を広げ、次の世代の親につなげる

【上原】「きんぎょの会」は、中野区教育委員会が開催した乳幼児の親向けの家庭教育学級に集まったお母さん達でつくったのが始まりで、今年で16～17年になります。家庭教育学級の中で、子供虐待防止センターの方が講師の「母親ばかりを責めないで」というテーマに集まったお母さん達が、「このまま別れてしまうのはもったいないね、私達に何かできることがあれば」と思って、つながりを持ちたいとグループをつくり、月1回ぐらいのペースで集まっていました。家庭教育学級というのは完全保育付きでした。そこで、今度は若いお母さんたちに、たった



上原信子さん

2時間だけれども子供と離れて、自分達の時間を持たせてあげたいと、地域センターや女性会館で講座を始めるようになっていったのです。その後、区内の各児童館を1年間ごとに回っていくことにして、それぞれの地域でお母さん達が自主的にグループをつくって、また次の世代を支援するお母さん達を育てたいと。今年で5年目になりますが、私達の力がなかなか及ばず、お母さん達のグループができるところ、できないところがあります。とにかく今は、お母さん達「仲間っているといいね」という思いを経験して、次の世代の母親につながりをつくってもらおうと考えて活動をしています。

【関口】今年は、5月におしゃべり会を実施しました。最初の回なので、どんなお母さん達が来ているのかなと、児童館の職員とも打ち合わせをして実施しました。その次に、“マタニティ・アフタービクスインストラクター”の方を講師に、簡単な体操の講座をしました。この時は保育付きで子供達は別室で、お母さん達がしばしお子さんと離れてすごりリラックスしたところで丸くなってもらい、一言ずつお話をしてもらいました。その時に、日頃すごく大変で久々に子供と離れたという感想が聞かれたり、例えば、スリッパを噛んでしまうのですがどうしたらいいですかという素朴な悩みも出てきて、じゃあ、今度はそういうことをお話しするおしゃべり会をしましょうと、次回の企画を提

案しました。

7月のおしゃべり会は1組の参加でしたが、だんだんと友達にロコミで広がっていくと思い、9月は、「2歳児がにくまれっ子って本当？」という講座を開きました。この時にお母さん達のいろいろな思いや悩みが出てきたので、もう一度おしゃべり会をしますよとリーフレットを配り、今日話し足りなかったことを「2歳児がにくまれっ子って本当？ —Part2—」でもう一度おしゃべりをしませんか、とお誘いしました。9月の講座は10組参加、10月のおしゃべり会は12組参加してくれました。



関口敦子さん

その後、11月には、鍼灸師の先生をお招きして、家庭でできる子供の体のケアを学びました。この回は24組の親子が参加してすごく好評でした。12月は、助産師の先生のお話で13組の親子の参加でした。今はお母さん達はいろいろと子育ての情報を知識として得るようですが、この先生は、子供の泣き声とか、だっこした感じとか、目を合わせて子供が何を要求しているのか、今どういう体調なのかということをお母さん自身が気づこうというお話をしてくださいました。

この後は、埼玉大学の先生によるコミュニケーション講座を開き、つながるという意識を喚起して、「自分一人で悩まないで悩みを共有する人がいたらいいね」とか、「もっと悩みを話そうよ」ということを学んでいただいてグループづくりにつなげていけたらいいなと考えています。2回のコミュニケーション講座で仲間づくりの足がかりをつくって、おしゃべり会を3月あたりに開く予定です。

「きんぎょの会」は少人数のグループなので、行政と大きく結びつくことはなかなかないのですが、関係する機関とは、いろいろな情報交換とかアドバイスを受けて、相談をしたりしながら活動しています。今地域にはいろいろな子育てサークルはあるのですが、仲良し同士でつくっていて、そのグループ以外の人を子育て支援して、いこうという視点になかなかならないのです。今、お母さん達はメールで連絡したり、ブログでつながったり、ということで、地域とは離れて広範囲につながっていると感じています。それが地域に根差していたり、ちょっと孤立しているお母さん達を助けてあげようという視点にはならないので、そういう人たちの意識を少し喚起させるようなお手伝いができたらということでやっております。

悩みも聞いてもらえて、子供の成長をよそのおばさんと一緒に喜べる拠点（サロン）をつくる

【山城】私達が住んでいる奥沢・東玉川地区は、近くに児童館がない地域で、自分達でいろいろやっていたという意識が高い地域の1つです。そこで、自分の子は大事だけれども、周りも一緒によくなれないといい子は育たないのだという考えから、近くの地区会館を使って、子供達と工作などを一緒にしようということを東玉川小学校のPTA活動としてずっと続けてきました。

そして私達は、お母さんの精神状態が安定していないと子供は安定しない、乳幼児期の基礎の時代にしっかり育てることによって、後がすごくいい方向に行くことを身をもって体験しておりました。ですから、ささやかでもどこか場所を設定して、ここに来れば悩みも聞いてもらえるし、子供の成長をよそのおばさんと一緒に喜べるという拠点をづくりたかったのです。それで、その当時のPTAの方からも「協力するから」と言っていただけたことと、



山城文子さん

そのときの校長先生や元校長先生達が、「BOP室が午前中あいているのだからBOP室でやったら」というお話をいただいて、早速準備に取りかかり、平成16年度から東玉川子育てサロンを、月1回でスタートしました。

そして、平成17年に東玉川小学校が地域運営学校に指定され、学校で今までやっていたことをもとに、プロジェクトとして取り組むことになり、校内緑化、学習支援、読書活動、家庭教育支援の四つをスタートさせました。その時に、せっかく校内でやっていることだからと、子育てサロンが家庭教育支援の活動の一つに入りました。

学校の中で安全ということもあり、いつも同じ場所でできるという利点があります。それから、学校内ではさまざまな行事があって、それを見学することで、今の小学校の様子を知る機会にもなって、とてもいいと思っています。

サロンに来るお子さんは大体3歳までで、幼稚園に入る前の2歳のお子さんが圧倒的に多いです。そのお母さん達に、私達自身が、いろいろな数多い失敗談などをお伝えすることによって、みんなそうだったんだとか、子育てはそんなに肩に力を入れなくていいんだと思っていただければそれで十分だと思っています。私達が当たり前と思っていたことを、意外に今のママたちが悩んでいることがあって、昔なら近所のおばさんに相談できたことを、ちょっと学校に来て、校庭の子供の様子を見たりしながら、そういう話をするのもいいなと思って続けています。私達のこの活動は、見守る姿勢で続けていこうということと、無理をしないでやっていくことが長続きするコツだと思っています。また、児童館とか住区センターなど、行政が提供する場とは別の拠点も増えればいいなと思って活動しております。

【内尾】私は、家の近くに児童館がなかったということもありますが、お母さんの中には子育てサークルが苦手だなという人もいると思うのです。またイベントも楽しいけれども、時間を拘束されたくないとか、子供のペースに合わせて行ける場所があって、ぶらっと来て、大人と話せる場所があって、そこに来て少し気が楽になる場があってもいいと思っています。私自身はお母さん達が大勢来て、しゃべって、子供を見ていないというサロンは苦手意識があったので、子供も自分もそばにいて、おもちゃで遊んでという場所は非常に貴重だと思っていまして、今来てくださるお母さん方も、そんなふうに思ってきているのかなと思いながら話し相手をさせてもらっています。



内尾奈緒子さん

継続的な「子育てサポーターの日」活動をもとにして、地域に広げる多様な取組

【山路】地域のつながりが希薄になっている中で、地域のつながりを再生し、お母さん達が立ち寄れるような身近な場所を用意できないかとスタートしたのが子育てサポーター事業です。今は、気軽な相談ができるような環境を提供することを第一の目的に、5か所の文化センター（公民館と児童館等の複合施設）で実施しています。

子育てサポーターをやっていただくに当たって、公民館で養成講座を実施しています。この講座では、今の子育ての事情をあらためてご理解いただいた上で、母親の気持ちに寄り添う対応の仕方や傾聴スキル、守秘義務など、対応に当たってのルールを学んでいます。

子育てサポーターの日常的な活動は、「子育てサポーターの日」という月1回の活動で、児童館で行っています。乳幼児連れのお母さんが自由にお越しいただいて、手遊び歌をやったり、紙芝居を読んだり、体操をしたりと、1時間半の活動をしています。最近、いらっしゃる人数が増えています。

「子育てサポーターの日」には、いろいろな悩みを持ったお母さんや、お母さん同士の交流を持ちたいという方もいますので、手遊び歌などをやりながら、サポーターが間に入って日頃のお話を聞きながら、積極的に結びつけるような声かけを行っています。また、年に何回か「サポーターの日」に、子供家庭支援センターの臨床心理士

に来ていただくなど、子供家庭支援センターと連携をしています。

また、「サポーターの日」の活動のPR活動として、年に1回「子育て応援フェスタ」と称して、子育てサポーターを中心に市内の子育て支援に関わる人たちが集まる集いを行っています。

また、中学校の家庭科の授業に、妊婦体験や乳幼児の出産について学ぶ「親育ち・子育て講座」を設けています。毎年、バースコーディネーターのお話の後、実際に赤ちゃんやお母さんと中学生が触れ合います。中学生は、小さい頃から親にこれほど大事にされて育ってきたのだという



山路孝さん

ことを理解し、一方で、お母さん達も、乳幼児が大きくなったらこんな頼もしいお兄さん、お姉さんになるんだということを理解する機会になっています。

先ほどの子育て応援フェスタでも、中学校との連携が必要だと考え、中学生にボランティアをお願いし、子供をだっこしたり、一緒に遊んだり、戸惑いながら乳幼児の世話をしてもらっています。

【木戸】私達の活動の中心は「子育てサポーターの日」の活動です。時折、ぼつんとしている方と話してみると、子供が言うことを聞かないとか、私達だとそんなこと大丈夫よと思うようなことをすごく悩んでいるのです。それで、周りのお母さんに、例えば「こちらの方が、お子さんが食べないと言っているけど、おたくのお子さんはどうす



木戸宏子さん

か」といってお母さん同士をつなげる役目をしています。お母さん達は、実は、自分で解決法を持っているので、それを引き出すような聞き方をしています。

また、以前「子育てサポーターの日」に来ていた方が、お子さんがちょっと大きくなったからと子育てサポーター養成講座を受けてくださいました。そういう形で、この子育てサポーター活動がずっと続いていくのではないかなと思っています。

あとは、子育て応援フェスタに来た人が、サポーターの日に一組来てくださったのです。私達サポーターは、「よかったです、また来ます」と言っ

てもらえるのがうれしいのです。毎回、一言感想をいただいているのですが、「今日、くちやくちやしていただけたけども、ここへ来て話ができてよかった」とか、「サポーターさんとも話ができてよかったし、ほかの方とも話ができてよかった」という感想が多くあります。ですから、こういう場が今のお母さんには必要で、長く続けたいと思っています。

【西郷】どうもありがとうございました。

少しずつでも地域の人や団体の力を借りていくことが、ネットワークづくりの第一歩

【西郷】ここからは、地域におけるネットワークづくりについて皆さんの活動からたくさんアイデアをいただきます。各団体だけで地域の活動を行っているわけではなく、それぞれの地域にある組織や施設と協力し合っていると思います。そういう関係や体制をつくるために、どのような方法をとっているのか。そうした関係をつくっていく秘訣やコツなどについてお願いします。

【三木】地子センでは、子育て中の親の主体的なグループができ、同世代の親たちに一緒に楽しくやりましょうというアプローチをしているところですが、地域のいろいろな育成者の方とつないでいくことが1つの課題です。子育て支援の講座などに出て、その地域の支援者たちと顔見知りになっていくことも1つですし、地域で預かりをやっている保育のボランティア団体とつないでいくこともあります。

「まんまるママの会」だけでなく、いろいろな形でほかの自主的な団体と交流したり、子育て支援団体と結びついていくようにつないでいくのが私達の役目だろうと思っています。

【八田】それから、地域のボランティアの方が月1回カフェを開いて手づくりのお菓子を出してくださり、ゆっくりお茶を飲んだりケーキを食べたりしながら、お母さん同士もつながっていくし、スタッフの人が先輩のお母さんなのでいろいろなことをアドバイスしてくれたりとか、子供の世話をしてくれる中で教えてもらうことも多く、そういうつながりが結構できています。

また、小学生や中学生が遊びに来ていて、育児アドバイザーの人に小さい子はこうなんだよと話してもらってから、乳幼児と触れ合ったり、お母さんと話すという経験をする機会もあります。こうした地域のいろいろな人とのつ



三木恵子さん

ながりができればいいと思っています。

【上原】私達は、誰かがお母さんを引っ張っていくのではなくて、みんなで手をつないで活動していければ楽しいねということを伝えていきたいので、あまり頑張らずにやっていますが、やはり児童館との連携はすごく大事だと考えています。「きんぎょの会」が、お母さん達に仲間づくりっていいよねという話をした後の児童館の方たちのサポートがポイントです。

【関口】グループとして育つには、児童館のフォローがすごく大切です。私達は、1年間活動するといっても月に1回行くだけなので、例えばグループの活動に意識のあるお母さん達がおしゃべり会に参加してくれたとしても、その後その児童館の常連になるかどうかは児童館がかかわってくださらないと、立ち消えになってしまいます。この連携はとても大切だと感じています。

【山城】世田谷区は、平成17年から、それまでの放課後の遊び場対策BOPと学童クラブを統合した新BOPを子供部と教育委員会の共同でスタートしました。私が両方にかかわっていたことが利点かと思っています。それと、PTAなどで小学校にもずっとかかわってきたことで、そういう地域とのつながりが先にあったことがよかったなと思っています。また、利用している親が、その後、お子さんが幼稚園や小学校に進んで、手が離れるようになった頃にボランティアとして手伝っていただければいいなと思っています。今、地域にも理解されはじめてきていて、細く長く続いていけばいいなと思っています。

【内尾】私はかつて東玉川子育てサロンに子供を連れて行っていました。今、子供は2年生になっているので、今度はボランティアとしてかかわっています。今、スタッフには私のような者と、栄養士をやっていた方がいて、小学校の今の保護者の方にボランティアとして入っていただきたいと思って声をかけています。ただ、この奥沢地域はボランティア活動が盛んでPTA活動も非常に熱心で、さらにお声かけするのが心苦しいのですが、月に1回ぐらいならいいわよと言ってくれる方もいるので、そういう方と一緒に続けていければいいと思っています。

【木戸】子育てサポーターの会の事務局は、一昨年までは公民館でやってもらっていましたが、去年から私達がやり始めました。ミーティングのための資料づくりなど、事務局のやることかと思っていただけて、今はどうしようかというのが今最大の課題です。さらに今年度、6年間の活動のまとめの冊子を作っています。このまとめ作りをやってよかったことは、自分達の活動の見直しができたことです。子育てサポーターが皆同じことを思って活動してきたはずなのですが、ズレが生じてきていて、それが確認できました。そのズレをなくすために「活動マニュアル」を作りました。今後は、この冊子やマニュアルを持って、いろいろな所に「こういうことをやっています。ぜひ応援してください。」とPRしていきたいと考えています。

【山路】子育てサポーター事業はもう7年目を迎え、どのようにPRしていくかが最大の課題です。公民館や教育委員会という部署から考えるとPRする場所が限られます。その中で、子育て支援課や子供家庭支援センターに行ってみたり、保育園を回ってみたりして、足繁く通うということが、基本的なネットワークづくり、全体的なネットワークづくりになっていくんだと感じています。

こうした意味も含めて、子育てサポーターの会の事務局を公民館がやっていたのですが、今年からはサポーターの会の方に事務局の多くをやっていただいて、ネットワークを広げてもらいました。

お母さん達が、“子育てしながら輝く” 場面をつくる！

【西郷】女性の生活形態や就労状況も大分変わってきているという視点も重要です。育児休業を1年から3年とる方が増えている中で、働いているけれども、子供が生まれてしばらくの間は地域で暮らしているという方たちへの対応を考えないととも思います。中野はどうですか。

【三木】中野の場合にはベビーのお母さんからいます。でも実際に活動しているのは1歳半ぐらいからの子供のお母さんですね。やり始めてみると何か目的を持ってやりたいと求めていたのだなというのが実感です。働いて、お子さんを生んで、家庭に入ってしまう人もいるし、3年間の育児休業をとっているという人も多い。職場復帰するとか、また働きたいという方がほとんどでした。外への渴望みたいなものもあると思います。落ちついてのんびり

時を過ごしたい人、自分探しをもっとしたいという人など、いろいろいると思います。その時に、お母さん達は、癒しの空間とアクティブに何かやれる空間とを上手に見きわめていて、その中で何人かが出てくるというのが実感です。やりはじめるとどんどん生き生きしてきます。この人達は、やりたいことがいっぱいあるようですごく積極的になります。チラシづくりから保育の手はずまで、楽しくやっています。これは児童館という活動の拠点があってこそできることですね。児童館に「まんまるママの会」のノートが置いてあり、みんなそのノートを見て、あとは個々に連絡を取り合い、メーリングリストで情報が届くようにしています。一人一人を見ると、悩みを抱えつつ、そのこと自体は解決されないまでも、違うところですごく輝いているので、ああ、いいなと思って見えています。

地域住民を核とした家庭教育支援チームづくりの7つの視点

【西郷】 ありがとうございます。皆さんのお話を伺って考えたことを7点話をさせていただきます。

一つ目は「担い手」、そして担い手が集まっている「**家庭教育支援チーム**」の中核は、やはり**地域住民**だと私は思うのです。なので、視点の一つ目は、そういった「**市民**」の**育成という視点**です。例えば、イギリスの地域の活動支援の教育は、市民性を育成するということに基本を置いていますので、これは子育て支援とか家庭教育支援についてもこういった視点が必要だということです。

2番目が、**人づくりという視点**です。地域を良くしていくためには、地域住民の人づくりが必要で、それがないと地域を変えていく人が育たないということです。こうした視点を持つべきではないかというのが二つ目です。

3番目は、**問題を発見するという視点**です。地域で家庭教育支援のどんな問題、課題があるのか、どんな不足があるかということです。〇〇地域はこんな地域課題があってこうしていこうという目標を共有していないと地域は動かない、チームは動かない、担い手は動かないということになります。



西郷泰之さん

4番目が、とりわけ**住民の方たちの組織化・グループ化という視点**です。形はさまざまだと思いますが、組織化をしていくことで、住民の方たちの力をより促進していくのだという視点が4番目です。

5番目は、4番目に関連しますが、**新しいネットワークを作っていくという視点**です。先ほど、ここは皆さんからお話がありました、子育てフェスタがあって人づくり、人との関係があるとか、顔見知りづくりをするとか、児童館や公民館をネットワークの要として活用していくとか、さまざまな声かけをしていくということがネットワークキングの手法だと考えられるのです。

6番目は、さまざまなネットワークをつくる住民たちが**提案をして地域を創っていく視点**です。新しい施設を建てるという物的なことも含めて、地域の活動実感に基づいた施策や活動の提案をするという視点が大事だろうと思います。

7番目は、**支援の質の管理という視点**です。ネットワークのメンバーはお互いが第三者ですから、第三者としてアドバイスをし合うという関係も必要だと思います。児童館、それから地域住民の方たち、サポーターの方たち、公民館の方たち、いろいろな方たちが絡むので、お互いがお互いの担っている支援について評価をして、アドバイスや提案をしていくことが必要になってくると考えます。

以上、基本的にはこの七つの視点を家庭教育の支援チームが持って活動していくと、それぞれの活動がもっと広がっていくのではないかなと思って伺っていました。

最後に、社会福祉分野では、親になるための学習方法なども研究、開発されていますので、家庭教育支援の分野でも、そういうものをもっと使っていくといいのではないかなと思います。

皆さんの活動が今後とも息長く続いて、つながっていくことを祈念して終わります。本日は、どうもありがとうございました。

平成 2 1 年度 乳幼児期からの子供の教育支援プロジェクト

地域プログラムの試行的取組 プログラム事例集

東京都教育委員会印刷物登録 平成 2 1 年度第 1 9 6 号

発行 平成 2 2 年 3 月 2 4 日

編集・発行 東京都教育庁地域教育支援部生涯学習課
〒163-8001 東京都新宿区西新宿 2 - 8 - 1
電 話 0 3 - 5 3 2 0 - 6 8 5 9

印刷 株式会社 東京デザインセンター
〒101-0047 千代田区内神田 3 - 4 - 9
電 話 0 3 - 5 2 0 7 - 6 3 4 1